五大洲探險記

第四卷

五大洲探險家

中村直吉
押川春浪共編

亞弗利加一周

95-74

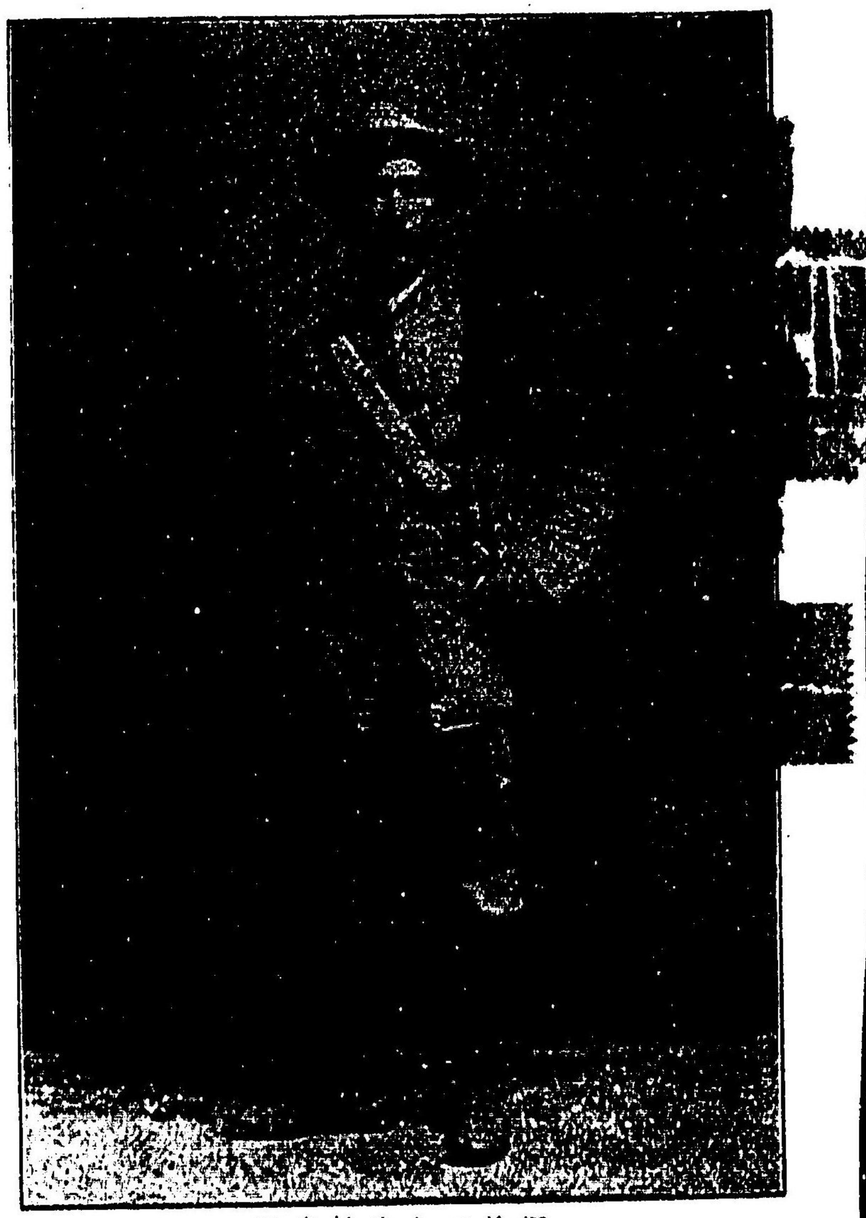
五大洲探檢記
4

亞弗利加一週

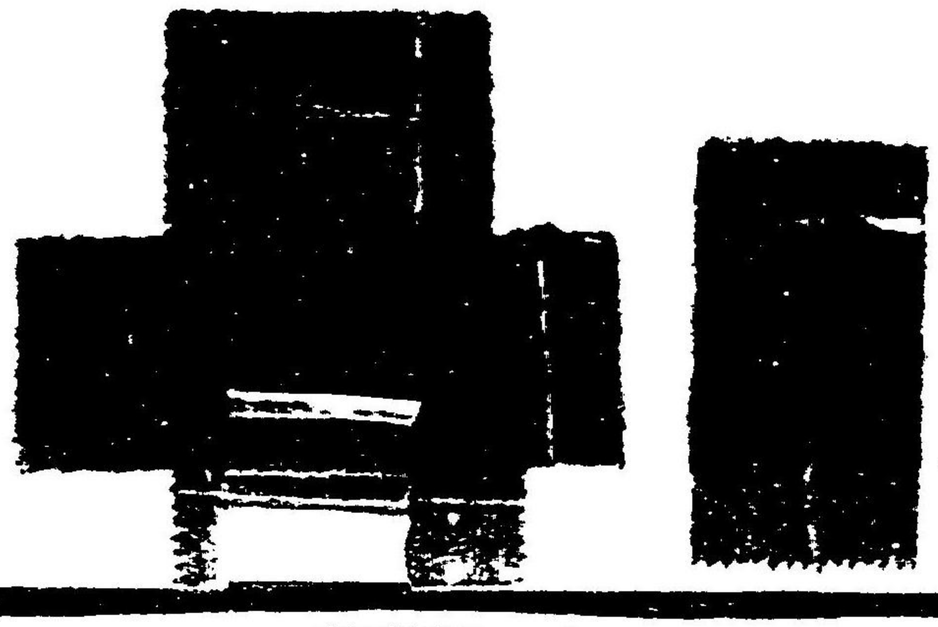
五大洲探檢家 中村直吉
冒險世界主筆 押川春浪 編

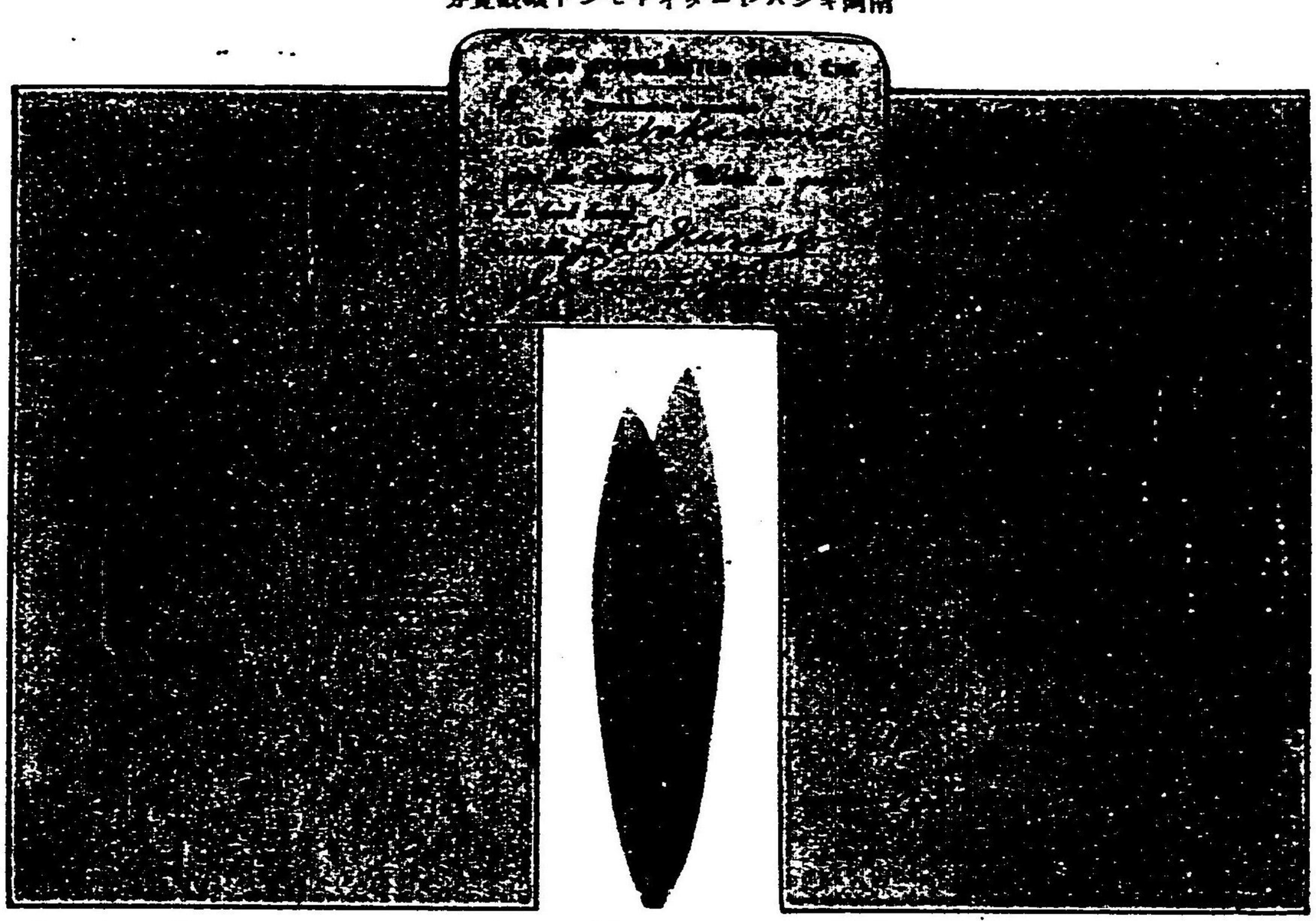
明治
43.11.21

東京 博文館 藏版



習直村中しせ検探





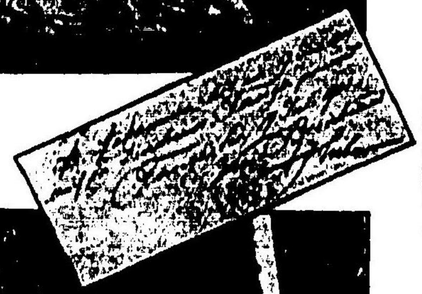
南阿ヲンパレーダイナモンド鑛製造所

を入に州ルーパスンラト阿南
拒絶されたる總督の府督答回

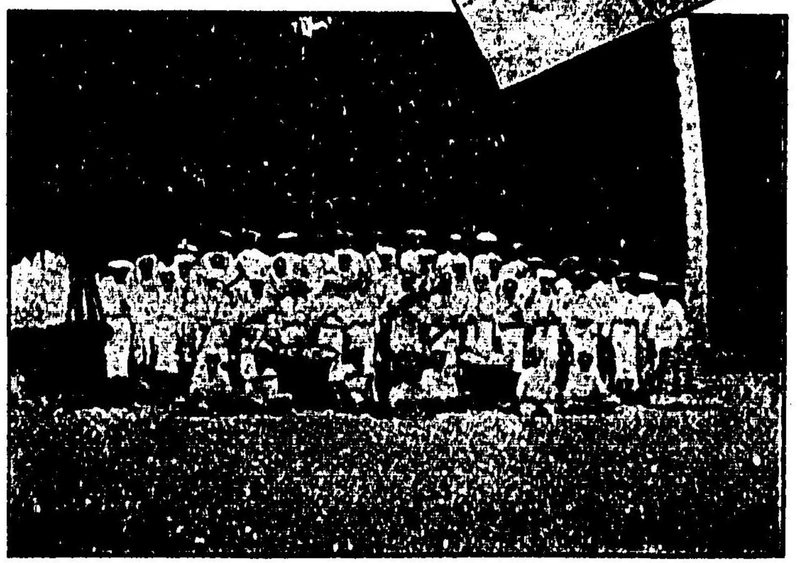
ーリフ、ーパルシ
（木　銀）

を行旅に州ルーパスンラト阿南
許可せられたる總督の府督ス

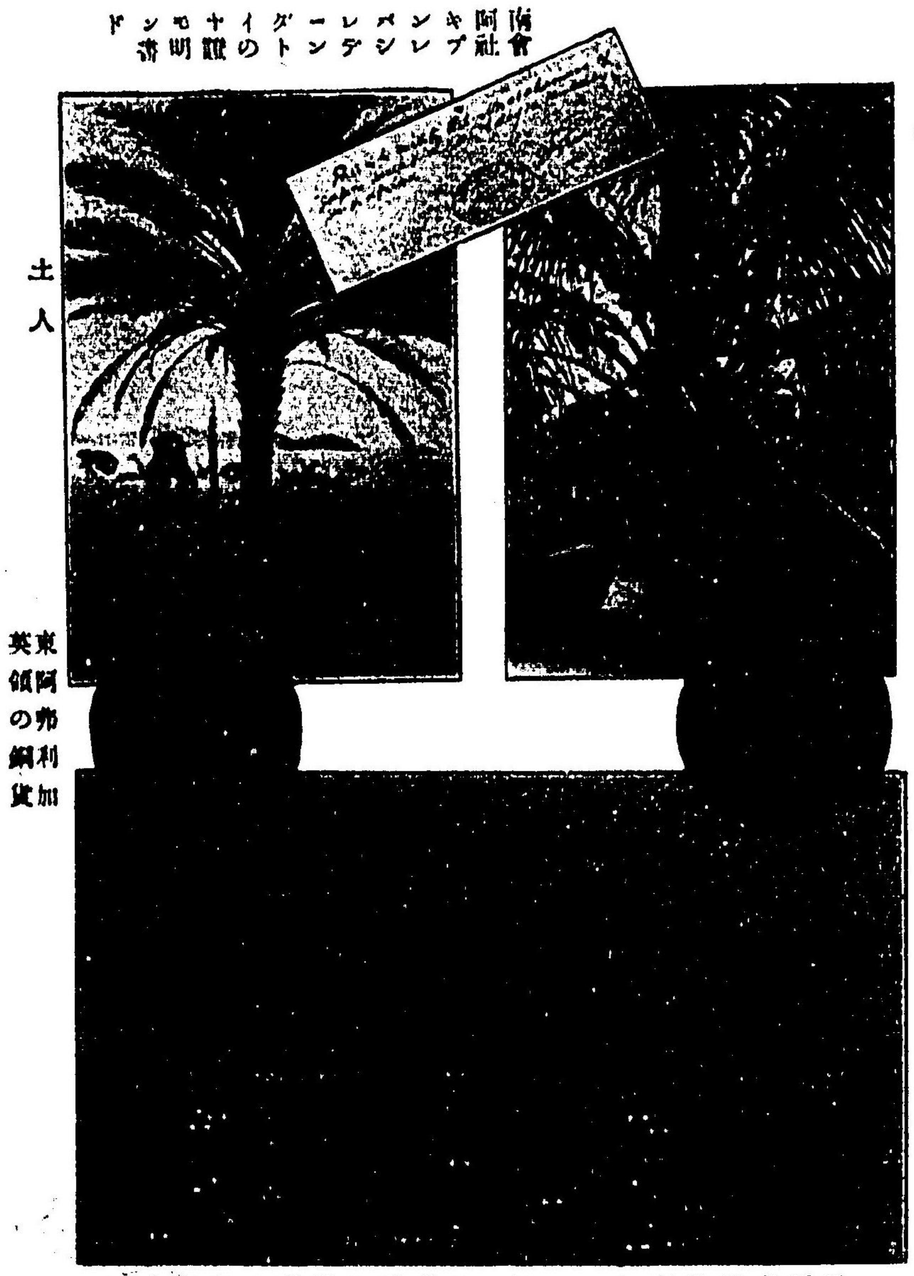
東阿弗利加の小學校生徒



東阿弗利加國境領ルンガー知事の授與書



ルンガーの學校音樂隊



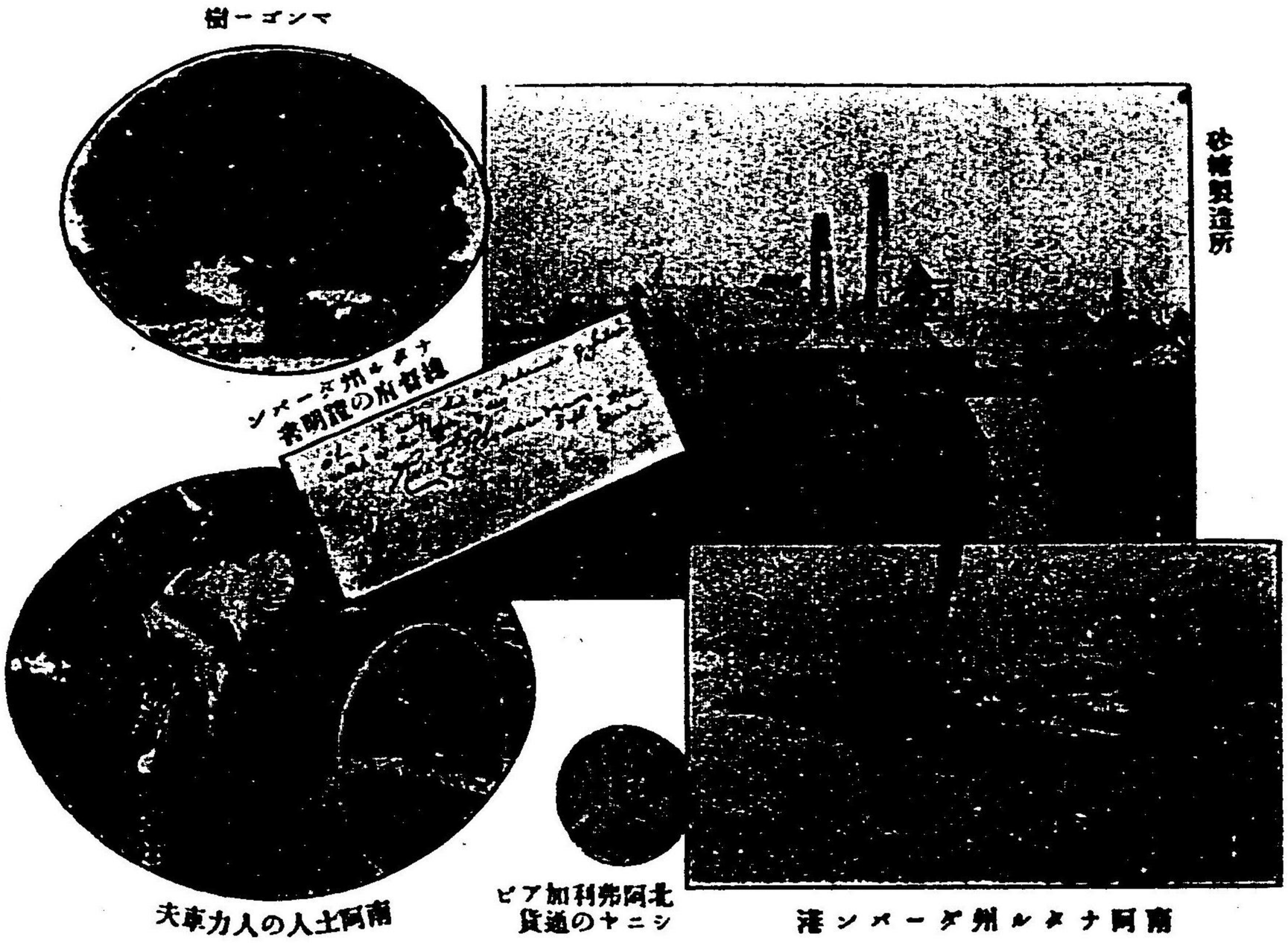
椰子の若木と

土人

東阿弗利加ザンジバルの通貨

東阿弗利加領の銅貨

獨領東阿弗利加ムンガーに於ける監獄の囚徒人


マンゴー樹
ソメーズ州ルタナ
無煙炭の露出
砂糖製造所
南阿土人の人力車夫
北阿弗利加ビア
ニヤの通貨
南阿ナタル州ダーバン港

南阿クープタウン港市街及テーブル山

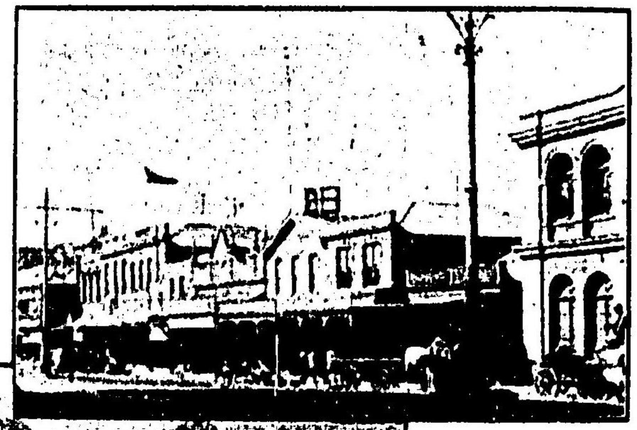
南阿クープコロニー統督の證明書

太平洋マデイラ島英國總領事の證明書

南阿古金貨とセシル、ローズの肖像

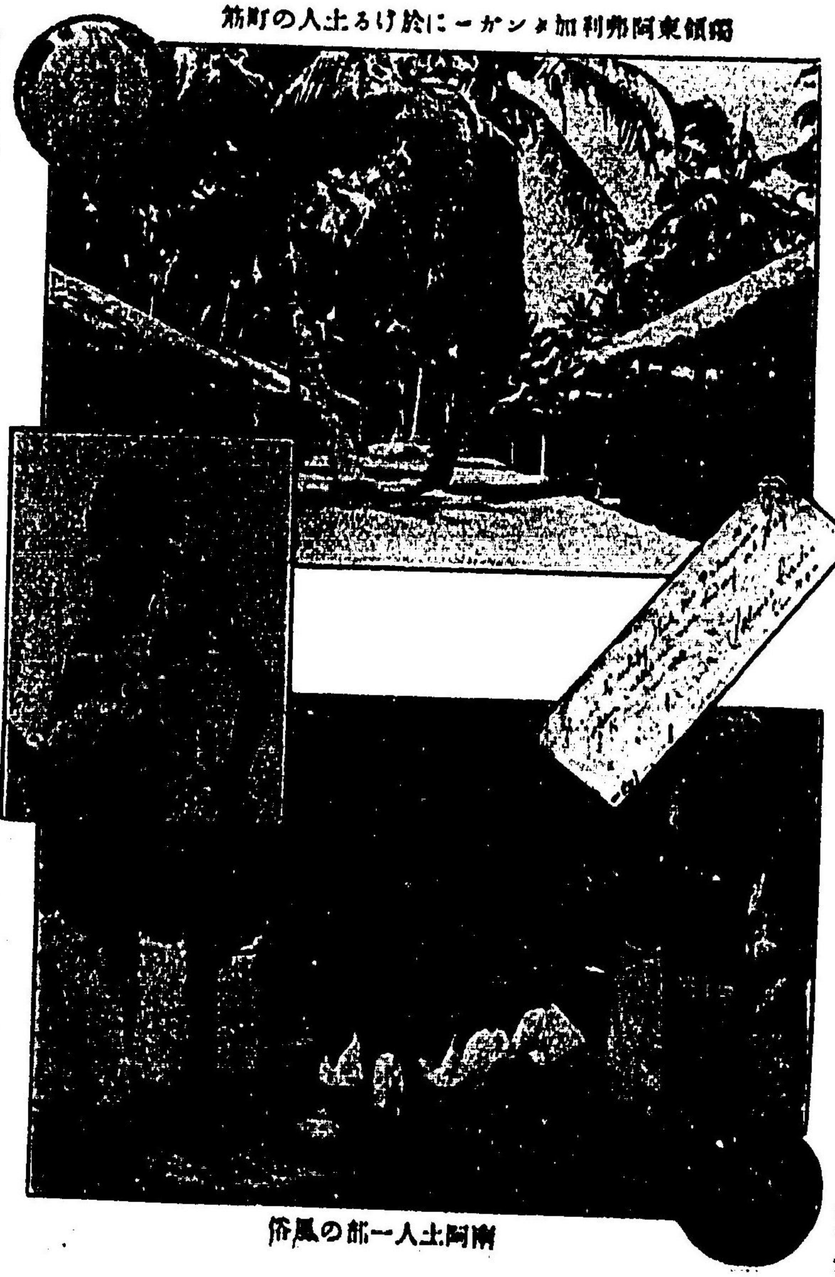
アフリカの大小人種

ナタル州ゲーバン街(商業中心點)



土人の家屋

倉田のルバロンザ、加利弗阿東



南阿土人一部の風俗

北阿弗利加エジプトの古金

トウンスバール州綿畑の證明書

南阿弗利加領の通貨

南阿弗利加ケンブリッジの婦人

南阿弗利加領東阿弗利加ゲンカーに於ける土人の町筋

五大洲探檢記　第四巻

目次

(一) 最後の手段……一
(二) サテは愈々甲板裁判か……八
(三) 大英雄の死場所……一八
(四) 無い袖は振られない……三四
(五) 滑稽いたづら運轉士(上)……四二
(六) 同　上(中)……四九
(七) 同　上(下)……五六
(八) 新聞利用の成功……六四

(九) キンバレーの金剛石鑛……七五
(一〇) 金剛石の秘密買……九七
(一一) ヨハネスブルグの大金鑛……一〇四
(一二) 南阿の白人は無賴漢である……一一一
(一三) 吾輩は世界探檢家である……一一八
(一四) 珍妙なる土人の牛頭車夫……一二五
(一五) 亞弗利加東海岸北航の首途……一三二
(一六) 英國紳士の獅子狩壯談……一四〇
(一七) 英人に侮辱された印度人……一五〇
(一八) 物凄き大森林の一夜……一五八

(一九) 痛快なる河馬狩……一六六
(二〇) 象は靈妙な動物である……一七七
(二一) 獨逸汽船の三等船客優待……一八八
(二二) 窮迫せる英佛二國の無錢旅行家……一九八
(二三) 警察署で一夜の拘留……二〇六
(二四) 留置場内の老酔漢……二一四
(二五) アルゼリア奇談(上)……二二五
(二六) 同 上(下)……二三七
(二七) 一夜を湖上の空船に明かす……二四七
(二八) 男裝せる瑞西の女農夫(上)……二五三

目次終

(二九) 同　上(下)……二六〇
(三〇) 地上の樂園と稱せらるゝ瑞西……二六九
(三一) 瑞西を去つて獨逸に入る……二八四

亞弗利加一周

五大洲探檢家
中村直吉
押川春浪　共著

(一) 最後の手段

乘船拒絶の憂目——一種乳樣の蟲——可恐い顏はして居られぬ——無賃乘船の承諾——尻尾を卷く必要なし

太西洋の一孤島で祝迷なるキャツスル汽船會社の支店長のために、一度な

らず二度三度まで乘船拒絶の憂目に遇はされ、危くマディヲ島に追退谷まるところを、最後の決心に鞭たれて、折柄出帆の荷物船に乘つたは乘つたが、さて頼みの綱の事務長が何といふやら？　揚錨作業が片付いて上甲板は靜寂した船は半速で港外に向つた。船橋で双眼鏡を手にして白髯の船長が、光の強い夕日を横顔に受けて、按針手を顧みて何かいつてるのが恰度油繪のやうに美しい。水夫が口笛でゴッド、セーブ、ザ、キングを吹いて通り過ぎた。北後を印度人と黑人の水夫が、眺澤山の英語で甲板作業のことを話しながら、聽て前部の昇降口から水夫室に降りて行つた。

暗車の響きが夢のやうで、白鷗がしきりに飛んで居る。

給仕にさういつて事務長に面會を求めて置たが、何うしたのか一向何ともいつて來ない。何だか不安のやうな、さうかといつて、到手が落付き拂つて居るところを見ると、安心しても差閊のないやうな、一種異樣の感に耽りながら吉

左右を待つて居るところへ、先剣の給仕が出て來て此方へといふ。そこで跟いて行くと、吾輩を事務室に連れ込んだ。

先づ度胸を据ゑて入つて行つた。事務長だらう、恐しい身長の高い男が立つて居る。併し別段可恐い顏はして居らぬ。

そばかすの疎らに浮いた毛だらげの大きな手を出して、事務長らしい男は吾輩の手をギユッと握つた。

『大尉お待たせ申しました。お氣の毒さま。私が事務長ですが、何ういふ御用ですか。』と有弊は職掌柄だけあつて如才がない。

『イヤ貴君が事務長でしたか、實は少々お願があつて罷出ましたのです。』といふのを、事務長は吾輩に椅子をすゝめ、自分も腰をかけて膝を乘出した。

『成程。』

『吾輩は世界探檢の途中で、是から南亞弗利加ケープタウンまで行きたい

と思ふのでありますが、貴船に便乘を願ふ譯には參りますまいか。」

「ホウ世界探檢！　それは近頃お盛んなことですなア。」と事務長は先づお世辭に無いて見せたいけで、肝腎の返答は忘れたやうにケロリとして居る。

「甚だ突然の申出で、御疑念もあるか知らないが、是を一つ見て戴きたい。」といつて吾輩は例の探檢地經過を證明した帳簿を示した。

事務長は暫らくそれを凝視めて居たが、

「今迄御乘船の場合には、一體何んな待遇をお受けになりましたか。」と興ありげに訊く。

吾輩は此に於て、乘船の殆んど總ての場合が好意的無賃であつたことを述べて、暗に事務長を動かさんことを試みた。といふと聊か語弊があるかも知れないが、事實が事實だから正直にさういふより外はなかつたのである。

「成程。」といつたきり、事務長は輕々しく諾否を明さない。

吾輩は敢て船賃を惜むのではない。さりながら無錢世界横行を標榜する身であつて見れば、惜しくない旅費も殊更に惜しまねばならない。況んやそれがマディラとケープタウンの間の賃金は、當時の吾輩は取つては正に由々しき大金であつたので、成るべくならば事務長を說いて、無錢で押渡りたいと思つたのである。で、其の時恰度持合はせて居たマディラ駐在の英國領事の紹介狀を出して、

「何とか特別の詮議で乘船を承諾して戴きたいですなア。」と事務長の顏を見上げた。

「本船でも今更貴君の御乘船を拒絕する譯にも參りますまい。といつて御旅行の目的と手段とが特殊のものである以上、此處で賃金を御請求申したところが失禮ながら貴君にそれだけの御用意もあるまいと思ふですから、英國領事の紹介もあることだし、無賃乘船の前例もあることが解つて居ますので兎に角私が

取計つたことにして、貴君を特別三等の待遇で一時ケープタウンまでの乘船を承諾しませう。」

吾輩にはお釋迦様の說法もキリスト様のアーメンも難有くないが、此時の事務長の言葉だけは心底から感謝を以て聞かずには居られなかつた。

無賃乘船の承諾！　何たる難有きことであらう！　佛敎の所謂救世の船とは正に此汽船を指していふのであらうと思つて、吾輩は幾度か感謝の辭を繰返しだ。

捨つる神あれば拾ふ神ありとは世の諺であるが、頑迷なるキャッスル支店長のために捨てられた吾輩は、幸にして此船の事務長に依つて拾はれたのだ。平素にも他人に讓らざる吾輩が、此時ばかり頭を下げて感謝したといふのも決して無理ではあるまい。

所謂最後の手段に依つて、大西洋の一孤島マデイラの地を離れることは出來

たが、若し無賃乘船を承諾せられなかつたならば、萬一の用意にと懷中の虎の子のやうに大事にしまつて置たケープタウンまでの片道賃金を吐き出さなければならぬ。假令それが當然の結果であるとしたところが、さてケープタウンに上陸してからの身の始末を如何にしてよいか解らなくなる。孤獨にも打勝たう不安も忘れることができやうが、山河萬里を隔てた南亞の一角に於て、若し現實の飢餓に迫られたならば吾身は果して何うなるであらう。全世界を殘る隈なく踏み破らでは再び故國の山河に見えじと決心した吾輩は、未だ南亞の地に於て屍を横へたくない。斯う思ふと懷中に多少の餘裕が生じたのを、少くとも吾輩前途のために深くも喜ばねばならなかつたのである。

で、吾輩は上甲板に殘して置た荷物をあてがはれた船室に運んだ。固より荷物船のことであるから船室は如何にも穢しい。正當なる賃金を拂つても不平はいへない位だから、隨樂守たる吾輩は、寧ろ此の穢さ加減を感謝しなければな

らぬ。

事務長が兎に角無賃乘船を承諾したのであつて見れば、如何に金錢を拂はないからといつて、無闇にビク〳〵するに及ばぬと思つたので、別に尻尾を捲く必要もなく、意を安んじて特別三等の待遇を受けた。水夫等も又吾輩に恩を着せるやうなこともなく、親切に取扱つてくれるので、それからといふものは極めて愉快な航海を續けることができた。

(二) サテは愈々甲板裁判か

二人共眼かな顔――此處まで來れば大丈夫――初めは一寸面喰つた――
――其だ變な工合だ――斯乎としていひ放つた――無罪の宣告――三國一の富士山より高い――甲板上の騒動

毎日〳〵海上は平穩であつた。吾輩は日記の整理をしたり、ケープタウンに着いてからの通信を、前以て書いたりして、ウカ〳〵と四五日を夢のやうに經

過したが、一週間目に突然此平穩は破られた。

午後の太陽は力强く上甲板を照して、灰色の噴煙は緩く甲板に直角に立登つて居た。吾輩は前部の欄干に凭れて、稍々濁つたやうな碧い海面を凝視して居たところへ、給仕が呼びに來たので、北奴の後に跟いて後部の方に行くと、北處には船長が事務長と並んで立つて居た。氣の故か二人共何となし嚴かな顔をして、何事も知らぬげに近づきつゝある吾輩を睨めてるやうだ。

此時吾輩は直覺的に、你り自分に對して結構なことが持上つたのではないなと見て取るた。併し最う此處まで來れば大丈夫、、、、まさかマデイラまで歸つて行けとはいふまいと度胸を定めて居るからモ氣なものだ。で、吾輩は二人に挨拶して、何か用があるかと訊くと、先づ船長が種々なことを訊ね始めた。

『ツム是だな、甲板裁判といふのは。』と吾輩は思つた。

船長の質問の要點は、マデイラ駐在の英國領事から事務長に當てた紹介狀を

乘船券と心得て乘つて來たが何うかといふのであるらしい。如何に吾輩生來鈍なりと雖も、紹介狀を乘船券と間違へるやうなことはしない。假令しやうと思つたところが出來得るものでない。又船長と雖も吾輩がさう思つて居らぬことは知つて居るだらう。然らば何故恐にもつかないことを訊ねるのだあらうか。吾輩も最初は一寸面喰つてしまつた。何と返事してよいか、苟くも甲板裁判の法廷に立つた被告としての吾輩の口から、へたなことをいはうものなら、それこそ如何なる意外な判決を下されぬとも測らぬと思つたので、船長の言葉の解らぬ振を裝ふて何といつてやらうかと考へて見た。

事務長が傍らから側事の紹介狀を乘船券と思つたのであらうがなと、何だか否應なく吾輩がさう思つたことにしてしまはうとするから、初めて閃電の如くに事務長の意のあるところを解することができた。

此點が面白いところだ。初め吾輩を引見して兎に角特別三等の待遇で便乘を

承諾したのは事務長である。つまり無貨で吾中村直吉を乘せた責任は事務長にあるのだ。然るに吾輩が若し此場合に於て、英國領事の紹介狀を乘船券と思つたのではないと答辯に及ばうものなら、吾輩は當然密航を企てたことになる。さうなれば事務長は密航者の乘船を承諾したことになつて、甚だ其處が變な工合になつて來る。そこで吾輩が例の紹介狀を乘船券だと思つて乘つたのだといつてしまへば、第一吾輩に密航の意志がなかつたことになるし、曳いては事務長にも其邊の責任がないことになるので、さてこそ彼が無理往生にさう思つたことにしやうとしたのであつた。で、吾輩は船長に紹介狀を乘船券と心得たといふ意味で答辯に及んだ。

「さうですか、それでは貴君は密航を敢てする意志はなかつたですね。」と船長は優しく根を押す。

「無論ありませんでした。」と吾輩は斷乎として言ひ放つた。

『イヤそれなら宜しい。』といつて船長は事務長を捉して、甲板の彼方へ靜かに歩み去つた。

暫くして吾輩は甲板裁判に於て無罪を宣告された。最初無罪とは豫期してゐたものゝ、何しろケープタウンまでの長距離の無賃乘船だから、少くとも甲板勞役位は當然課せられるだらうと思つたが、それさへ免れて立派な船客になりすましたので、愈々氣が晴々して、海の景色まで急に美しくなつたやうに思はれるのも嬉しい。

マデイラ島を出帆して三四日目、船はカナリー群島の間を抜けて南下した。此群島は十四個の島嶼から成つて居る。カナリフ、グランドカナリー、ラスパラムス、サンタクロース等の諸島は、其中でも重なもので、十四島中六島だけには人家があつて、多くは漁業を營んで居るといふことだ。島は春夏の二期があるだけで、一年中秋冬の氣候がない。群島中の高山は一萬七千呎もあると

いふから、三國一の富士の山よりは餘程高い。無論頂上には千古の雪が積つて居て、永劫の昔を語りたげにキラ〳〵に朝日に輝いて居た。

佛領ケープヴアード諸島を右舷に見て、ダウン號――書き忘れて居たが此船はダウン號といふので――は刻一刻に船脚を南に延ばした。

セネガル河の沖合からガンビア河の沖合に到るまでの一帶の海面は、潮水が非常に濁つて居る。是は以上の二河流がセネガンビアの内地から濁水を吐き出すからである。此邊は遠淺で港らしい港は一つもない。

リベリアの沖を南々東の針路で暫らく南方に下ると、船は何時しか赤道を通過してしまつた。日本を出發して以來是で赤道通過が三度目だ。此船でも矢張り形ちばかりの赤道祭は行つたやうだ。

經驗のない人は、赤道といふと懼が焦けるやうに思ふかも知れないが、強ちさうでもないやうだ。殊に此時は左程の高熱でもなかつた。日中九十度夜間六

十度といへば、日本でも此位なら珍しくはない。尤もソヨとの風もないから、日本などの暑さとは感じが違つてるのは事實だ。殊に夜間溫度が急激に降つて來るから、人間の健康には餘り良くはない。それであるから熱帶で、陸上でもさうであるが、殊に海上生活をするものは、此邊に餘程注意しないと厄病神に纏込まれる。日が暮れても宵の口蒸されるやうに熱いといつて、裸體で窓でも明け放して寢やうものなら、待構へたやうに熱病に襲はれる。さりながら赤道直下に於て、一種異樣の溫熱と鬪ふのは隨分辛いことは辛い。

赤道を超えて南緯の海に乘込むと、さらでだに激しい暑氣が一層猛烈になつて來た。

南緯八度の海面に於て、アッセンション島を右舷船首に認めた。セントヘレナ島はまだ見えない。ダウン號は今や太西洋の眞只中である。

ダウン號は元來荷物船であるが、當時恰度南亞戰爭の濟んだ頃であつたので

荷物の外に南亞行の移民を乘せて居た。其中には男が八十人、女が六十人、子供が二十人居た。男は無論勞働であるが、女の仕事は主として下女奉公で其他子守なども混じつて居た。

是等の移民の中には契約移民もあれば自由渡航もあつたが、吾輩の一寸珍しく思つたのは、女が一種の家內勞働契約移民として取扱はれて居たことであつたので、彼等は目的地に到着した後の給金から、渡航費の立替を拂つて行くのであるさうだ。

で、總て是等の移民連は、男となく女となく能く酒を飲む。日本などでも勞働者といふ奴は酒を飲む癖があるが、西洋人は殊にそれが激しい。彼等は酒を飲んでは醉拂つて愉快に騷いで居る。そして男女相擁して躍つたり跳ねたりする。見て居ると陽氣で甚だ面白いが、女だてらに葡萄酒の喇叭飲みをきめこむ豪傑があるに至つては、下戸の吾輩少なからず驚かされてしまつた。

舞踏はマンドリンや太鼓や笛に依つて行はれる。隠藝といふのであらう、種々な人間が種々の樂曲を奏でる。暑苦しい三等船室で、是等の男女が狂つたやうに騒ぎ廻はるとき、吾輩は如何に考へ直しても太西洋の眞中に居るやうな氣持がしなかつた。倫敦邊りの場末の酒場で、酒好きの倫敦兒が、宵越しの錢を不祥がつて、悉皆アルコールにしてしまふのを目のあたり見て居るやうな氣持がしてならなかつた。

彼等は斯くて午後九時までは騒ぐが、船橋の時鐘が冴えきつた調子で九時を報ずるのを合圖に、パッタリと音樂も舞踏も止めてしまふ。そして各自寢仕度に取掛る。此騒擾から掌を返すが如くに靜粛に歸するところが、如何にも英人氣質を現はして面白い。彼等は下等な勞働者であるけれども、船の規律といふことは能く重んじて居る。

是等下等船客の寢室は、嚴重に男女の區別が立てゝある。午後九時からは假

令夫婦であつても、同室に在ることを絶對に禁じて居る。九時の時鐘が鳴つて婦人の下等船客が、定められたる船室に退くと、特別の番人が其室の入口に立番をして、規律の亂れないやうに警戒をして居るといふと、何でもないやうだが、それが如何にも心持よく行はれる。勿論船の規律其物が嚴正なからでもあらうが、是を守るものが忠實でなければ、是程都合能く捗取るものでない。

斯の如くにしてダッン號は急に南下を續けた。其内に下等船客の間に一騒動持上つた。それは斯ういふ譯だ。同じ南亞渡航の移民中に、猶太人が十人ばかり居たが、此中の一人が一英人の遺失した指環を拾つて猫糞をきめ込んで居たのを發見されて袋叩きにされたといふ事件なんだ。猶太人は徐程痛快に鐵拳を頂戴したらしい、オイ〳〵と手放しで泣き出した。英人等は海の中に投り込むとかいつて大騒ぎをやらかして居たが、其内に船長や事務長が飛んで來て仲裁をしたゝめに、結局品物を遺失主に返戻して無事に落着に及んだ。

(三) 大英雄の死場所

セント、ヘンナ見ゆ——デダラスの飛行翼が欲しい——双眼鏡を手にした大奈翁——ロンゴ、ウードの邸宅——年金の減額——偉大なる英國の監視——奈翁最後の一語

右舷船首雲煙模糊の間にセント、ヘレナ島を望んだ。

セント、ヘレナ！　英雄の羽板主大奈翁が最後の息を引取つた處だ！　あの灰色の島の何處かに、吾大奈翁が居たのだと思ふと、渺々の彼方に空しく相訣れるのが惜しいやうな氣がする。吾輩は船が推進機にでも故障を起してセントヘレナ島に寄ればよいがと思つたが、それが叶はぬ願だと知れると、今度は飛んで行きたいやうに思つた。往昔デダラスは其子イカラスと共に、クリート島からシ、リー島まで飛んださうだが、ア、吾輩は今其デダラスの飛行翼が得たいと思つた。そしてロングウードに六年幽囚の跡を弔ひたいと思つた。

ダウン號は無言の儘に寄せては返す大きな長濤を乘超えて、暗耳の響きもゆるやかに南へ南へと進んだ。セント、ヘンナの島影は船の右舷正横に於て、稍々其輪廓を明らかに吾輩に見せてくれた。

千五百〇一年五月廿一日、葡萄牙の航海者ジョアオ、ダ、ナヴァが發見してから三百年の後、あれ程の英雄を迎へやうとは、島それ自身も豫期しなかつたであらう。賊にセント、ヘレナとしてだけならば、吾輩に於て何等の感興も呼起さないが、世界が有した最も大なる英雄終焉の地として、後世人は絶對に此島を空しく見過すことはできない。

島は南緯十五度五十五分二十六秒西經五度四十二分三十秒の海洋にある一孤島だ。長さ十哩半幅貳六哩周回二十六哩といへば餘り大きい島ではない。嘗つては火山島であつたといふことだが、現今は島の諸所に横はる火山岩や熔岩に名殘を止めて、表面だけは靜寂に歸して居る。併しながら世界が餘りに沈滯

に腐敗すると、奈翁の靈の感應を受けて居る此島は、何時爆然として噴火しないとも限らぬ。

島中の高山はデアナ山といつて、海拔二千六百九十七呎ある。

地味は豐穰で農作物は能く稔る。就中竹珈琲バナ、穀物等は島の名產だ。加之到る所風光明媚だ。

恰度吾輩が水夫からセント、ヘレナが見えるといふ注進を受けて上甲板に上た如くに、九月十五日の朝、奈翁は目的地たるセント、ヘレナが見えると侍臣に注意されて、双眼鏡を片手に上甲板に上つて來た。そして彼に取つては奈落にも等しい此島を、其沈鬱を眼で凝乎と眺めた。此時彼の心中は果して何うであつたらう。大理石像の如くに佇立した彼は何事をもいはずして、前方に居然たるセント、ヘレナあることを忘れたるが如く、嘯て靜かに下甲板の船客に降りて行つた。

奈翁を乘せた英船は十五日の午後ゼームス、タウンに錨を投じたが、奈翁は島人に顏を見らるゝを厭ふて、午後七時の日沒を待つて上陸した。そして一時土地の紳士ポルチアス氏の邸宅に入つた。

序に書き添えて置くが、奈翁が此島に來た當時既に白人が五百人ばかり黑人が三百人ばかり居つたのだ、大西洋の一孤島に、如何にして是だけの住民があつたかといふと、其時代は勿論のこと、最近スエズの運河が開通するまでは、此セント、ヘレナこそ東洋通の船舶に取つては、南部大西洋に於ける唯一の寄港地であつたので、當時既に千人近くの住民が居た譯である。

當時吾輩が右舷の方遙かにセント、ヘレナを望んで思出した奈翁の逸話が少しばかりあるから、此所へ其二三を書き添へて置かう。英雄を追懷するの道として、蓋し無益な業ではなからう。

奈翁はセント、ヘレナではロングウードといふ所に居たが、其所へ彼の住宅が

建築されるまで、プライアスといふ所のコックバーン氏の家に一時滯在して居た。といふと何でもないやうだが、家といつても其實コックバーンの物置小屋であつたのだ。偖つて巴里の大宮殿に於て、歐洲全土を睨睥した彼が、一英人の物置小屋に詫住居しなければならぬやうになつたとは、定めなき世といひながら、英雄の末路も又實に憐れむべきではないか。

當時コックバーン氏にまだ幼けなき姉妹の娘があつたが、奈翁は姉妹を相手にして、無邪氣な遊びに耽けるのが常であつた。姉妹が能く佛語を解することができたので、奈翁は自ら彼等にお伽噺のやうなものを話して聞かせ、又は其にトランプを弄んで笑ひ興じたものだ。で、姉妹は自然奈翁と心安くなつてきたものだから、窃と後から窺ひ寄つて彼の耳をつまんだり目隠しをしたりしてふざけた上句に、何かといふと奈翁のことをボネー〳〵と呼んだものだ。此ボネーといふのはボナパルトの略稱で、寧ろ輕蔑的の意味に使用されるのが普

通だといふことだ。而も奈翁は姉妹に對するときは、一切の過去の尊嚴を忘れて、無心の少女のボネー〳〵といつて膝にまつはるのを何よりの慰藉として居た。

ロングウードに移つてから暫らく經つて後、奈翁一家の年金が減額されたので、其平素用ひ來つた葡萄酒まで、從つて著しく下等のものになつた。そこで彼は此事を近侍に向つて不平していふには、此頃の葡萄酒は朕が砲兵少尉の時用ひし葡萄酒よりも遙かに劣等である。と、あゝ昔つて玉酒酌むに任せた彼奈翁が、薄給の少尉の用ふる葡萄酒だも飲むことができなくなつたとは、阿修羅の如く歐洲を震駭せし罪の報ひが今來たのか、さるにても運命の變轉が除りに急激ではあるまいか。彼がジョセフィンを擁し、マリー、ルイザを抱き、チュレリーの大宮殿に於て、人知れずもらせし得意の微笑は、今將た是を何處にか求むべき。夜毎の夢の醒め勝ちに、ありし昔の榮華を偲ぶとき、恐らく彼は其

鐵の如き拳を握り締めたであらう。

彼はツオートルローの會戰に於て、無殘や一敗地にまみれ、嚴峻なる英國政府の監視下に置かれたけれども、而も彼は自ら皇帝の尊嚴を傷けざらんことを努めた。彼は此事に就て屢々知事ローと衝突した。彼は總ての公文書にナポレオン皇帝と書かれんことを望だにも係らず、ローは奈翁の最も厭ふボナパルトを以てした。コックバーン氏の娘からボネーと呼ばれて滿足した彼も、英國官憲に對しては飽くまで帝者を以て任ぜざるを得なかつたと見え、ローの頑迷なる反抗を惡んで、世間彼の如き沒分曉漢なしとまで罵倒するに至つた。

奈翁は英國の官憲に對して斯の如く狂大であつた如く、又彼に隨從する臣下にも又己に向つて禮を失するなからんことを戒めた。彼の臣下は何人と雖も彼の面前に於ては直立して應對しなければならぬ。グールゴーやモントロンやペルトランの近侍に至るまで、決して彼に向つて惰容を示すことを許されなかつ

た。或時ペルトランが奈翁の面前で思はず欠伸をしたことがあるが、彼は帝の叱責を受ける前に、臣は既に陛下の前に直立すること三時間に及び申候といつたので、辛くも叱られずに濟んだといふ話さへある。

奈翁はセント、ヘレナに於て英語を學び始めたが、熱心でなかつたと同時に少しも進歩しなかつた。彼が侍臣のヲカーズに送つた英文の手紙を見ると、其文法上の誤謬や綴字の間違やらが餘りに多いので、多少英文の心得のあるものには失笑したく思はれる位だ。日本の中學生なら二三年の生徒でも、斯の如き拙い文章は書かぬ。が、彼が世界第一の英雄だけに、其拙い處にいふべからざる面白味があるではないか。

彼は乘馬が好きで、能く遠乘りに出掛けたものだが、英國の守備隊士官が餘り蒼蠅く附き纏ふので、遂には其遠乘さへ止めてしまつた。

あるに甲斐なき幽囚の無聊を慰めるために、彼は好んで將棋を侍臣と戰はし

たが、下手の横好きとやらで、其手際たる甚だ拙劣なものであつたさうだ。でお相手の役を承つた侍臣は、常に帝をして勝たしむるに就て、非常な苦心を其都度したといふことだ。此點は日本の大名の碁と能く似て居る。負かさうものなら忽ち殿の狲猩玉が破裂するのだから、お相手の役は所謂小心翼々で、自ら敗北せんことをのみ希ふのだ。奈翁と雖もまさか將棋に負けて手打にするとはいふまいが、侍臣に佞を非めされるとは知らずに得意がつて居る處は、如何にも大風な帝者らしくて面白い。

彼は醫師の勸めを容れ、自ら鍬を採つて耕作の業に從つた。彼は草花や野菜を作つて樂んで居た。で、迫々侍臣の雖彼にも勸めて畑を耕やさせた。ペルトラン夫人の如きは、帝から鍬を持たせられて、幾度も閉口したことがあるさうだ。

射的は又無聊を忘るゝ一種の方法であつたが、將棋が下手であつたが如く、

是も又頗る拙劣極まるもので、住宅の境内を徘徊する野獸を狙撃しては喜んで居たが、或時誤つてペルトラン夫人の愛犬を打殺し、夫人をして悲嘆の涙にくれしめたこともある。以て彼が如何に射的に於て無鐵砲であつたかゝ解る。

千八百二十年の八月頃から漸く健康が悪境に陷つて、椅子に凭れた儘最早動かうともしなかつた。或日侍醫アントマルシの腕に倚りかゝつて、次の如き絶望的の意味を漏らした。

「朕を放樂せよ。休息こそ如何に樂しきものなるよ。朕は今世界の總ての王位を捧げらるゝとも是に換ゆること能はず。噫！　朕は疲れ果てたり。無限の活動力を有して精神更に眠ることなかりし朕は、今や惻愴に陷りたるなり。曾つて朕は奈翁なりき。されど今日最早何者にも非ず。朕が能も力も朕を見捨て去れり。誠や朕は今生活せるに非ずして存在するのみなり。」と。何ぞ其言の悲痛なる！　烈々として焔の如き大功名心を蔵せし帝の胸は、斯くして遂に氷の

如く冷たくなつたか!?

朕は世界の總ての王位を捧げらるともそを一の休息に換ゆることすら能はず

―アントマルシの腕に凭れて斯うはいつたものゝ、此刹那に於ける彼の懊惱は如何に切實であつたらう。恐らく是は純なる告白ではあるまい。肉の衰へが是程彼の精神に威力を加へたとは何とあつても思はれぬ。されど彼が斯く告白したのは事實である。後世人は此絶望的の言葉を聞いたばかりで、斉つて世界が有した最大なる英雄の末路を吊はんとするのは大早計だ。彼は遂げんとして遂ぐることのできなかつた偉大なる野心に、慥かに大なる執着を有つて居た。それは彼が遺言書にもほのめかして居る。ウォートルローの敗北が、必ずしも彼の罪でなかつたことゝいふのは即ち其證據だ。さりながら事實彼は彼のいつた通り、生活せるに非ずして唯僅かに存在するに過ぎなかつた。千八百二十一年一月に最後の乘馬を試みたが、それすら病勢を增す原因となつたばかりで

三月にはアントマルシが英國軍醫と計つて藥を勧めたのと、

『何事も起るべきことは起るなり、且つ吾人の生命には限りあり。運命は終に人力の左右し得るものに非ず。』といつて折角の申出を聞き入れなかつた。

千八百二十一年四月十四日、遙々佛國から送つた其愛子の大理石の半身像を枕元に置て、初めて遺言狀の起草に取掛つた。モントロン及びマルシャンの二伯爵が、枕邊に侍して彼を補けた。五月になつてから精神朦朧として始終軍中にあるが如き譫語を發し、五月五日には病勢急に革つて、一切は早や悉く絶望と見えた。戸外には折柄の颶風雨が騷々しかつた。彼の自ら植ゑた樹木は仆れ、斉つて其下に憩ふを常とした柳の木さへ根と共に吹き飛ばされた。

夕方の六時に風は死んだやうに吹き歇んだが、其時は既に奈翁は絶息して居た。然り吾が奈翁は永遠の眠りに就いて居た。

超えて九日、英靈天に歸した奈翁の遺骸は、生前帝の最も愛好せる綠色の

近衛騎兵大佐の軍服に掩はれ、嚴重に防腐の設備を施した三重の木棺に納められた儘、ロングヴードを距る三哩、ハッツ、ゲートの附近なる谷間の花園にある柳の木の下に葬られた。彼は遺言してセーヌ河畔に葬られんことを願んだが英國政府の承諾するところとならなかつたので、終に前の如くワレー、デユ、フエルマーンの地下に棺を横へた。折柄ゼームスダウンに碇泊中であつた英國軍艦は、此稀代の英雄の死を弔ふために十二發の大砲を發射した。

それから暫らく年經つて奈翁と仲の惡かつた知事ハドソン、ローはセント、ヘレナの任を解かれて歸國したが、後四年守備隊長として印度セイロンに留ること三年、職を辭して英國への歸途、乘船をセント、ヘレナに寄せて上陸し、ロングヴードに杖を曳いて親しく奈翁の葬邸を見舞ふたが、ローは荒涼たる有樣を見て有繋に今昔の感に堪えなかつたであらう、人知れず低い吐息を洩らしたといふことである。

ローといふ男は奈翁在世中、事々に彼を壓迫することにのみ熱中した知事で既所にあつてすら尙且帝者を以て任じた奈翁に取つては、彼位好ましからぬ人間はなかつたであらうと思はれる。彼は奈翁を殆んど捕虜のやうに思つて居たで、出來得るだけ其尊嚴の程度を減じやうと苦心して居た。其苦心は又實際事實として現はれた。現にロングヴードに奈翁のために建築した邸宅の如きは、假令彼が最早佛蘭西皇帝でないにしたる處が、彼のやうな大人傑を迎へ入れる邸宅として、決して適當であつたといふことはできない。是は單に一例に過ぎないけれども、殆んど總てに渉つて意志惡く奈翁を苦めたローが、何が故にロングヴードの葬邸を見て斯の如く長大息したのであらうか!?

奈翁の親しく使用した玉突臺は、農夫の乾草架になつて居た！　奈翁の最後の息を引き取つた寢室は、馬小屋になつて居た！　奈翁の親しく鍬を取つて植付けた邸内の花園は、馬鈴薯畑になつて居た！

英雄の末路に一片同情の涙を灑ぐものは、最早是以上をいふことはできないが、伴つて奈翁を苦めたローも、此荒れ果てたる有様を見ては、其冷やかなる胸にも多少の悔を殘したであらう。隔世の感に打たれて長大息せる如きは寧ろ當然といはねばならぬ。

千八百三十年ブルボン家のシャール十世廢せられルイ、ヒリップ代つて立つや、佛國民の甘心を負はんと欲し、首相チエルをして、奈翁の遺骸を佛國に改葬せんことを英國に求めしめた。

英國では此要求に接すると同時に内閣會議を開いて其諾否を議した。首相ウエリントンは厳として佛國の申出を拒絶せんことを主張したが、其他の總ての者の反對に會つて遂に我意を折り、直ちに返書を送つて速かに佛國の要求を容れた。

千八百三十年五月十二日は、佛國下院で恰度砂糖税の討議中であつたが、突

然議場に入つて來て、奈翁の遺骸改葬に關する英國の同意を報告したので、砂糖税のことなんかは打忘れ、議員は拍手と歡呼の聲を以て其報告を迎へ、喧々囂々の間に改葬費用一百萬フランの支出を議決してしまつた。此時は總ての議員が徐程婚しかつたと見え、氣狂のやうになつて騒ぎ廻つたので、議長が是等を制するに三十分もかゝつたといふことだ。

斯くて佛國の改葬委員ジョアンヰル親王以下の一行は、其重大なる任務を果すべくセント、ヘレナに向ひ、あらゆる敬虔を以て十月十四十五日の兩日に沙つて遺骸を掘り、十八日佛國軍艦に載せてセント、ヘレナを出發、十一月二十九日シエルブールに歸着した。

感情の定まらざることホッテントットの如き佛國民は、伴つて生ける偉敵手に渡せる奈翁が、再び蘇らざる遺骸になつて佛國の郷土に歸つて來たのを迎へて、如何に痛切悲嘆の感に打たれたであらう、十二月十五日、故帝が臨終左

右を顧みて遺言せし如く、物都かなるセーヌ河畔に其尊敬すべき遺骸を葬つたときは、言ひ合はさねど悉く聲を上げて泣いたといふことである。

(四) 無い袖は振られない

ケープタウン入港――不安は不安を生む――所持金はあるか――吾輩は探險家なり――乗船賃が欠きたい――支店長も困つた顔――あると き拂ひの催促なし

快談奈翁が最後の息を引取つたセント、ヘレナ島は、吾輩の感慨が深くなればなるに連れて、其黒い影が灰色になり、灰色が又一片模糊たる浮雲の如くなつて、遠き地平線の彼方に消えてしまつた。

其翌日は降雨だつた。山のやうな長濤が北太平洋の方から、ダウン號を呑みにせんず有様で押寄せる。

夕方降りあぐんだと見えて、空は拭つたやうに晴れ渡つた。美しい夕栄が海

一面に照り返つて、船も人も蒲かれた如くに華やかであつた。

斯くて船脚が南に延びつゝある間に、二十三日の長航海は漸くにして終りを告げ、ダウン號は無事に其錨をテーブル灣の奥深く、ケープタウンの前面船渠附近に投じた。

多くの船客は各自に荷物を纒めてゾロ〳〵と下甲板から蟻のやうに這上つて來た。彼等の顔には初對面の大陸を前にして烈々たる希望の光が漂ふて居る。彼等は故國を離れぬ前から想像にのみ描いて居た南亞の地が、今手を出して招かんばかりに前面に横はつて居るのを見ては、包みきれない心の喜悦を、最も無邪氣に最も露骨に現はさない譯には行かなかつたのであらう、男も女も子供も躍出さんばかりに騒いで居た。併し吾輩はさう喜んでばかり居ることはできなかつた。それは前編から繰返し〳〵不安に不安を重ねた亞細亞人の南亞上陸が果してできるや否やといふことが今數分の後には解決がつくといふ大事の瀬

戸際に立つて居たからであつた。

陸上から官吏が出張して一々上陸者を取調べる。そして逆支のないものはドシ〳〵上陸を許して居る。吾輩は此有様を見ると氣が氣でない。其内に五六人の猶太人が何か文句をいはれ始めたが、嘸てはそれが自分の身に廻はり合はせてでも來るやうに思はれて、天涯萬里蠻中常に餞なき風來兒だけに、前途を悲觀するの度は一時急に高まつて來た。

北内に順番は川拾なし吾輩に廻はつて來た。山雨到らんとして風樓に滿つ、氣の故か何だか殖民地官吏の顏色が危險だ。

『貴下は英文を讀み且つ書くことができるか。』と官吏はツカ〳〵と吾輩の面前に歩みよるなり斯う訊いた。

『左樣、御意の通りで御坐る。』と答へて吾輩は先づ彼の顏色を窺ふた。

『所持金は充分あるでせうね。』

官吏は斯ういつてヂロ〳〵と吾輩を見る。其胡散臭い眼付が甚た氣味が悪い所持金は充分あるだらうなど、何だか人を見くびつたやうな冷かすやうなことをいはれて見ると、此方もヘタな返事は出來ぬ哩とサテ考へて見やうにも、躊躇し居ることのできぬ矢先とて、吾輩も度胸を据ゑて次のやうに答へた。

『左樣、旅行の目的を達するだけの用意はしてあります。』

それぢやア出して見せろといはれると、其實ホンの草鞋錢ばかりだから聊か當惑の至りだが、まさかにそんなこともいふまいと思つたが案の定、尚ほも吾輩の方をヂロリ〳〵と見ながら、有繋に其處までは突込まなかつた。

そこで例の五大洲探檢家と肩書した名刺を出して見せると、先生是で餘程度膽を抜かれたと見え、

『それでは貴下は大探檢家で御座つたか、では一向逆岡はありませぬ。何卒御隨意に御上陸なさるが宜しい。』といひながら他の三等客の取調べに取掛つ

た。

案じるより生むが易いとは此事である。初めて南亞行きの希望を抱いてから此處で上陸ができるかできないかといふことに就て、吾輩はどれだけ不安の念に驅られたか解らない。それが今此處で造作なく目的を遂し得られたので、ホッと一息吐きながら早速上陸の用意に取掛ると、船長が吾輩を折柄來船して居たキャッスル支店の事務員を紹介した。而も單なる紹介ばかりならよいが、何だか吾輩が無賃で乘船したことまで話したらしい、其事務員と同道して支店まで行つて見ると、今度は其處で支店長がマデイラからケープタウンまでの乘船賃を拂へといふ。是には吾輩ホト〳〵當惑してしまつた。何か何だか少しも解らなくなつて來た。船長と事務長とが既に承諾して居る筈だから、今更船賃の請求を受ける筈はないと思ひながらも、サテ眼前拂へといはれて見ると、何とか其處を旨く取繕めて、此難關を切拔けなければならない。さうかといつて、

船と支店との間に、如何なる相談がしてあるやら、其邊も解らないしするから有繋の吾輩も其時ばかりは一寸面喰つてしまつた。併し結局無い袖は振れないので、自分が無錢世界探檢旅行者であることを告げ、遺憾ながら支拂の請求に應ずるだけの餘裕がないことを打明けると、支店長も困つたやうな顏をして、

『一體日本の汽船では外國の無錢旅行家に如何なる待遇を與へることになつて居ますか。』と訊く樣子が滿更でもなささうなので、

『それは信用すべき無錢旅行家であつたならば、寧ろ喜んで無賃乘船を承諾するにきまつて居ます。』とさも知り拔いたことのやうにいふと、支店長も半分合點して半分不審のやうな顏をして尤者を傾けた。

處が其處へ恰度船長が上陸して來たので、それをきつかけに支店長が船長に向つて、吾輩の始末に付て相談を持掛けたらしい、盛にペラ〳〵辯つてたが、暫ら經つて、

『貨はキャッスルの汽船では無賃乘船といふことは絶對に許すことができないので、甚だお氣の毒ですが規定の貨金だけは申受けなければなりませぬ。』と支店長がいふ。

オヤ〳〵是は些し風向きが又變になつて來た哩と思つて居ると、支店長は言葉を續けて、

『併しながら今貴下に向つてそれを請求したところが、失禮ながら到底でき得べき望みもないので、斯うして戴きませう、弊社の方で御請求だけは申上げますから、貴下に於て相當の餘裕があつた場合には、貨金だけの金額を會社の方へ御送附を願ひます。』といふ。

是でホッと一息吐くことが出來た。世の中に錢の無い奴へ錢を拂へといふ位沒理窟なことはない代りに若しあつたら其時に拂へといふ位寛容なこともあるまい。吾輩其時實に感謝したのである。併し考へて見ると安心な譯だ、債權

者がキャッスル汽船會社といふ大身代で、債務者が氣まぐれな人魂のやうに何處へでも飛んで行く無錢の風來坊ときてるから、無論文句は其場限りで未來永劫拂へといふことは決していふまい。

斯の如くにして英國出發以來不安に堪えなかつた南亞上陸が首尾能く成功したとして見れば、吾輩の旅行の如きは寧ろ幸福に滿ちて居るといつてよい。マディラに於ける乘船拒絶の如きは、ケープタウンの土を踏んで考へて見ると、旅行上の苦心としてはまだ〳〵輕い方といはなければならない。吾輩は是から南亞の諸方を踏破つて、更に東部亞非利加を北上しなければならぬ。前途は實に遼遠である。障害の起り得べき機會は、今後の行程到處に吾輩を待構へて居る。されど吾輩はそれ等の總てを打破り、勃々たる滿身の意氣を益々痛快に發揮して進まう。

(五) 滑稽いたづら運轉士 (上)

厄病神第一世——敏腕な好士官——滑稽な一等運轉士——命令書の文句——不思議な貴婦人——通風筒の中に隠れた厄病神——船長閉ぢ込められる

吾輩の乘つた荷物船の船長はL氏といつて極めて快活な人であつた。一體汽船の習慣として船員は乘客と餘りなれ〳〵しくしないことになつて居るが、此船の船長はそんなことには頓着なく、吾輩などを捉へて盛に其快談の鋒先を向ける。普通ならば肩身の多少は狹かるべき無賃乘船の身上ながら、マデイラ出帆以來一日たりとも左程の不愉快を感ずることなく航海することができた。

軍艦が軍規風紀の點に就て非常に嚴格であることは今更說くまでもないが、客船にしろ貨物船にしろ、汽船でも矢張り規律が立派に立つて居て、或程度迄は軍艦内の規律と異らない程である。此點は一度汽船旅行をしたもの〻氣付かねばならぬことで、汽船の平民的使命をのみ見慣れた眼には、一寸異樣に感せらるゝところである。

それに就て面白い話がある。是は吾輩が直接船長から聞いた實話で、而も船長自身の經驗である。吾輩が此處で其話を三人稱で讀者に紹介するより、船長の談話を全部其儘並べ立てた方が興味が深からうと思ふから、一人稱で物語の緒口を解くことゝしやう。以下私といふのは船長L氏自身のことたるや論無しである。

最う餘程以前のことだが、私が數日の休暇を利用して、久方振で自分の家に歸つたことがある。或朝のこと例の通り朝餐の食卓に就て居ると、船主から手紙が手許へ屆いて來たので、何氣なく開封いて見ると、今迄乘つて居た汽船からR——號へ轉乘の命令が封入つて居た。

私は困却つたことができたと思つた。忌憚なくいへば私は轉乘するのを好ま

ない。R――號は同じ船主の持船の中でも、どちらかといへば老朽船である處へ、私は今迄の汽船に乘つて居るのを滿足して居たから、餘計に轉乘するのが厭で堪らなかつたのである、それから又R――號の船長といふのが、何だか斯う變に根性の曲つたエキセントリックな人間だと聞いて居たので、此點に於ても更に一層氣が進まなかつたのである。併し船主の命令に對して無闇に我儘もいへないので、兎にも角にも荷物を取纏めて其汽船に乘ることにした。

R――號で初めて船長に面會して驚いた。身長が精々五呎もあらうか、頓と風采のあがらない、見るから卑賤しげな人間であつた。

其船長のニック、ネームは隨分思いきつて猛烈なもので、厄病神第一世及び喝捨てた糸屑などゝいへば、乘組士官から水夫給仕の末に至るまで知らないものはない位だ。彼は殆んど誰にでも嫌はれる。厄病神第一世の名の起る所以で、喝捨てた糸屑とは彼の形容が如何にも見すぼらしいのを現はもたの

であるらしい。どちらにしても餘り難有からぬ名前である。

一等運轉士に會つて見ると、思ひ掛けない前に一所の船に乘つて居たことのある人であつたので、今迄氣の進まなかつたのも、此人と再び一所になつたといふことに於て大に慰められた。殊に私が四等運轉士として此人に從屬することになつたのは、私の身に取つては願つたり叶つたりであつた。一等運轉士は高等海員として無論敏腕な好士官であつたが、尙ほそれ以外に極く著しい特點といふのがある。それは非常な惡戯好きであるといふことであつた。天性滑稽の素質が身に備はつて居るものだから、時々得意の惡戯が原因となつて、例の厄病神第一世の逆鱗に觸れることがあるだらうと思つた。

處が私の想像は果して適中した。私が乘つてからR――號は直きに出帆した海峽にかゝる頃から強い南西の風が吹いたが、それも間もなく靜まつてから、船は愛したやうな海を只管目的地に向つて急いだ。

斯うなると船長は性質として離乎として居られない。で、退窟凌ぎに何か缺點を捜さうと思つてコツ〳〵船内を巡廻り始めた。スルト早速一つ見付かつた。それは何ういふ譯かといふと、彼の見るところでは部下の士官等が餘り乘客と親密に爲過ぎる、殊に貴婦人に對して著しいといふので、其夜の船橋命令簿には早速船長の自筆で、自今船員は乘客に對し相當の威嚴を保つべしといふ文句が掛かれた。

此命令は公式的な舞踏會とか音樂會とかの場合を除くの外は、士官は成るべく乘客との交際を避けて自室内に蟄居して居るべしといふ意味だから、誰も彼も喜ぶべき道理がない、そればかりでない、吾々は貴婦人等と相談して、却つて此命令の裏を掻かんことを企てた。

厄病船長は斯うした嚴格いことをいふけれども、北實如何なる交際が士官等と乘客の間に行はれて居るか能く知らなかつた。彼の見たところは唯甲板上

の現象に過ぎない。それだから表面さへ彼の思つた通りになれば、彼は至極お目出度く滿足してしまふ。

北内に這麼事が起つた。夜になると必ず貴婦人が二人プロメチード、デッキを散歩する。併しそれが餘程妙で、彼等の散歩は船長の居ないときに限られてある。そして常に深くショオルで以て顔を蔽ふて居る。〻、散歩して居ても船長がやつて來ると、屹度そこ〳〵に姿を闇に隱してしまふ。といふのだから、厄病船長益々不思議に思つて、何うかして正體を見顯はしたいと焦慮つたやうだが、例の通り幽靈のやうで一向に要領を得ない。そこで代る〴〵吾々に、北貴婦人の誰であるかを訊ねた。處が不思議にも實際吾々はそんな事を少しも知らなかつた。斯うなると船長の好奇心は絶頂に達せざるを得ない。で、何とかして自分で不思議な貴婦人の誰であるかを見出してやらうと決心した。

翌日の晩、船長は食事を少し早目にきり上げ、大急ぎで甲板に出て貴婦人の

出て來るのを待つた。處が却々出て來ないので、先生思いきつて大きな通風筒の中へ隱れて機の到るを待つた。

夜のことではあるし、まさか通風筒の中へ隱れやうとは、神ならぬ身の誰知るまいと思つたのが失敗の基で、其實水夫長が船長の隱れる處を見て居たので可怪ことをする哩と思ひながら、直ぐにそれを船橋に當直して居た私に報告して來た。其時本直の一等運轉士は食事に降りて居なかつた。それで彼が再び船橋に上つて來たのを見て、水夫長が眉けて來たことを話すと、

『イヤ愉快！　愉快！　何とかして困らせてやらう。』と一等運轉士は惡戲好きだけに雀躍して喜ぶ。

私は何うするかと思つて見て居た。すると一等運轉士は急に後甲板手に命令を下した。

『ケンバス、カヴアス、オン、オール、ベンチレーターズー』

是は總ての通風筒に掩布をかけろといふ號令だ。

此號令は速かに果された。一等運轉士はうまい〳〵と手を拍つて喜んで居る。

船長は暫らく通風筒の中に隱れて居たが、固より掩布がかゝつたとは知らないから、いゝ加減な時を見計つて、例の二人の貴婦人の正體を見顯はしてやらうといふので、ノコ〳〵顏を出さうとするとこはそも如何に、出口は外から掩はれて今や正に袋の鼠である。

(六)　滑稽いたづら運轉士（中）

貴婦人盛にしやべる——船長恐々閉口す——厄病神帆布を裂いて出づ
——女裝して船長を揶揄す——尻にペンキが着く——船中騷動往生——
——船長の仇打

午後八時を報ずる八點鐘が、冴えきつた夜の空氣を搖がして遠く波に乘つて

消えてしまふと、一等運轉士は何か思ひ付いたやうな顏にニコ〳〵した微笑を浮べて船橋を降りて行つた。

吾輩は屹度先生何か仕出かすに相違ないと思つた。スルト案の定、例の得意の快辯で旨く貴婦人を五六人船室からをびき出し、厄病船長の隱れて居る通風筒の直下に故意と並べた甲板椅子に坐はらせ、盛にペチヤクチヤと船長の悪口を言はせた。

是には船長も恐らく閉口したであらう。出やうにも出られず、さうかといつて聲をかける譯にも行かず、齒を食ひしばつてツン〳〵唸りながら、難有くもない罵詈を聞いて居なければならなかつた。斯うなると一等運轉士も人が悪いといはなければならぬ。

驚てのことに貴婦人連は解散した。併し無闇に騒ぎ立つて飛出す譯に行かない。で、船長は甲板の消燈時まで苦しい辛抱をした。最う斯うなれば誰も見て居る

ものはないといふので、ポッケットにしまつて居たナイフで、通風筒の口を掩ふたカバーを切り開き、其穴からノコ〳〵と這い出した。處がそれを誰知るまいと思ひの外、二三の水夫が見て居たので、船長はテレ隱しに彼等に向つて、通風筒の中から煙が出るので、其原因を慥かめるために送込んで今出る處だと言譯らしくいつたが、其時ばかりは隨分苦しかつたらしい。

船長は此夜の出來事に就ては、それから何事もいはなかつたが、翌日計らずも彼は前夜の無念を晴らす機會に遭遇した。といふのは翌日が猛烈な霧で前方の展望が非常に妨げられたのを幸に、船長は一等運轉士以下に六時間の復直を命じた。普通の航海ならば四時間交代の單直であるが、それが急に復直の六時間になつたのだから、士官等はそれがために甚だしく休養の時間を奪はれた。而もそれが其後二三日續いたには、有繋の一等運轉士も閉口してしまつた。

一寸いふことを忘れたが、驚きに不思議な貴婦人が二人毎夜甲板に現はれるといつたのは、あれは二等運轉士と三等運轉士の二人が女裝して、故意に船長をからかつたので、此事も後に至つて船長に暴露してしまつたのは滑稽であつた。

滑稽といへばまだ〳〵餘程痛快なのがある。

右舷通路の中央に通風と光線を取る目的で上部の甲板に窓が二つ開けてある。吾々の船室が恰度其近處にあるからだ。で、此窓は上部の甲板より少し樣高になつて居て、堅材の格子で穴が塞いであつたのだ。處が乘客がチョイ〳〵來て、窓の格子に腰を掛ける。一寸椅子の代用をして、位置も比較的よい處にあるので、大抵朝から夜遲くまで誰か腰を掛けて居ないことはない位であつた。

成程乘客には都合がよからうが、固より通風と光線を取るのが目的だから、乘客殊に婦人の大きな臀部で、餘り廣くもあらぬ格子の全面積を塞いでは、風

も通さなければ光線も射し込まない。就中少し蒸し暑い天氣の日には、室内に居る士官連の閉口は並大抵でない。で、色々と腰掛豫防の方法を相談した結果、格子へワニスを塗つて置くことにした。斯うして置けば如何に氣の利かない乘客でも氣が付くだらうと思つてると大間違、尤も知らずに來て腰を掛けるのだから罪はないが、罪なのは腰を却した奴の臀部に市松の模樣が付くことで、士官等も是で暫らくは快哉を叫んで居た。實際乘客の過半は之で失敗した。併しワニスを一々塗りかへるのが面倒とあつて、今度は少し人が悪過ぎるが新いし武器を案出した。それは無論一等運轉士の考案で、或朝先生の私室に例の特殊の笑聲がしたので、私は何事か又起つたに相違ないと思つて出掛けて見ると、刷毛掃木の長柄の一端に鋭い尖らした鐵針を結び付けて居る處だつた。

私は此武器の用途を直ちに悟つてしまつたので、こいつは大に面白い、有繋一等運轉士は悪戯の隊長だけあると感心して居ると、果して其翌日から格子に

腰を掛けた乘客が、ア痛ッー　と叫びながら臀部をさすつて飛上り始めた。無論彼等の臀部をチクリと刺したのが何等の作用であるか知らないので、或者は唯不思議がり、或者は隣りに坐を占めた者を責めたが、一向に其依つて起る苦痛の原因を知るものはなかつた。

其内に滑稽なことが持上つた。それは外でない。恰度其航海に乘り合はせた或有名なる女流聲樂家が、何も知らずに例の格子に腰を掛けた。スルト直下の士官室では、ソラ誰奴か又閉塞した、構はず突刺てやれといふので、一等運轉士考案の武器で、そつと知れないやうに、其聲樂家の臀部をイヤといふ程突き上げた。突かれた方では恐らく餘程痛かつたであらう、未だ嘗つて出したことのないやうなけたゝましい叫びを殘して、いとも不興氣に自分の船室に歸つて行つた。然るに其時海圖室から出て來た船長が其有樣を見て、何か變だ哩と思つたのであらう、聲樂家の飛上つて立去つた後へチャンと腰を下ろした。と思ふ

と直下では、そら誰か又腰を掛けたといふので、ウンといふ程突きあげたから堪らない、船長はキャッといつて立上つた。そして何か不機嫌さうに獨語きながら海圖室に入つて行つた。

有繋は厄病神とまでいはれるだけあつて、船長は直ちに事の眞相を看破してまつた。で、廻て士官室にやつて來て一等運轉士にいふには、

『君、誰か腰を掛けたものがある也。恰度い、處で、突き上げてやり玉へ。』と。

そこで吾々はそッと通路に出て見た。成程誰か腰を掛けてる奴がある。這麼時には惡戲の急先鋒は一等運轉士だ。で、例の武器を小脇にかい込み、ウンと格子の目から突き上げると、キャッといつて飛上つたと思ふと、上からバケッで一杯ザアーと水をぶつかけられた。一等運轉士は頭から溺鼠のやうになり、ブル〳〵と體を震はしてオヤ〳〵ー

是はいふまでもなく、船長が一等運轉士に向つて復讐したのだ。

(七) 滑稽いたづら運轉士 (下)

船長と船醫の同盟——二人の捜索列——運草で偵察——秘密監視——
馬鹿々々しさに我慢できず——痛快なる復讐——二人共大閉口

船長は口癖のやうに健康が惡い〳〵といつて居た。そこで自然乘組の船醫と親密にして居たやうであつた。其船醫といふのが又顏色の蒼い、見るから骸骨のやうな男で、船の者から乞食船醫とまで綽名されて居た。

一方は厄病神第一世、他の一方は乞食船醫で、孰れ劣らぬ好取組である。從つて二人は意氣相投合したゝめか、或は同病相憐れむといふ譯か、兎に角其間柄が馬鹿に親密で、恰かも形影相伴ふが如く、殆んど片時もお互に離れて居たことがなかつた。で、若し二人が一所に居ないで居るやうなことがあれば、それは吾々の警戒を要する事の起る徵候だと思つて差支はなかつた。例へば船長が後部甲板をブラ〳〵目的もなく散歩いて居ると、前部甲板を船醫が素知らぬ

顏でコツ〳〵歩いてるといふやうに、何でも斯うして二人が吾々士官連中の一舉手一投足を探偵するのであるらしかつた。一等運轉士も慥かにさうだといつて居たが、自分も又さうだと思つて居た。それが頗る面白いので、世間はお互に口にくはへたパイプを、種々に動かすことに依つて偵察するらしい。それから夜間は燐寸を摺つて一種の發光信號を行つてるらしかつたのだ。

船醫なぞといふものは、夜間甲板に用のあるものではない。それに此男に限つて大抵毎晩のやうに甲板に上つて來る。そして暗闇を沈默り込んで、こつそりとブラ付いて居る。さうかと思ふと時々船橋などにノコ〳〵上つて來る。どうしても船長と共謀になつて居るとしきや思へない。船長と二人で一所に甲板に出て居るときは無論だが、若し斯うして船醫一人で甲板視察を行つてる時は三十分とか一時間とか一定の時隔を置て、船醫が一々船長の處へ報告に行くらしい。吾々は二三度そんな處を見たことがある。

船長と船醫の二人は吾々士官等に對して、實にどれ程意地惡くできて居るか解らなかつた。それは船醫の奴が時とすると夜半過にノッソリと甲板に現はることがある。さうすると船長が船醫に代つて、夜半から朝までの間を吾々に知れぬやうに見張るやうにすることだ。だから吾々は船橋で當直して居ても、誰か今自分等の擧動を秘密に監視して居るものがあると思ふと、馬鹿々々しいのも馬鹿々々しいが何だか不愉快で堪らなかつた。

そこで吾々は到底何時までも這麼馬鹿な目に會ふのを我慢することができなくなつたので、何うにかして彼等二人のすることを止めてやりたいと思つて居た。併し如何にして其目的を遂するかといふ一段に至つては、不幸にして誰も具體的の妙案を抱いて居るものがなかつた。何しろ船長は一船の長として、全船を支配し得る大權を有して居るから、假令彼のやり方が非常識であり且又無禮極まるものであつても、職權を正當に働かすのだといはれてしまへばそれ

までのことで、吾々から彼の行動に拘束を加へる譯に行かない。船醫は船醫で又其職責たる船内衛生に就て必要なる注意を拂ふのだといつて見れば、吾々から彼に對して苦情を申込む譯に行かない。そこで彼等二人の運動の範圍を機械的に閉塞するより外に、一流獨特の意地惡を防ぐ良法はなかつた。

吾々は此意味に於て早速防禦の手段を講じた。スルト其晩例の通り船醫が暗闇の中を甲板巡視に出掛けると、思ひ設けぬ處に椅子だの何だのが置いてあつたので、彼はそれに衝突して太か向脛に傷をした。殊に其時彼は薄い寢衣の儘であつたので、平常よりは餘程痛かつたに相違ない。

是で船醫に向つての復讐は一段落濟んだ。處が船長が又同じく剛に當つたから面白い。それは二三日經つてから船長が少し跛足になつたので初めて解つたので、能く調べて見ると、右舷前部の救命艇の短艇索が、普通ならば艇内に捲回して置てなければならぬのが、何うした譯か短艇甲板に捲回した儘置き放し

てあつたのへ、船長が例の通り眞暗闇を幸にしてノコ〳〵短艇甲板に上つて來た途端に衝突したので、跛足は其時膝か何處かを打つた爲めであつたのだ。其時恰度船橋の舵輪に就て居た操舵手は、何か短艇甲板でドサリといふ音がした後に、斯う人間がムニャ〳〵獨語くやうな聲を聞いたと吾々に向つて話したが、それこそ船長が短艇索につまづいて轉んだのであつた。一等運轉士も自分も操舵手からさう聞いて、さては天罰が當つたかと密かに會心の微笑を洩した。

何ぼ頑迷な連中と雖も、揃ひも揃ふて道理目に遭遇しては、よもや今迄のやうなこともできまいと思ふと、豈に計らんや益々平然たるもので、有繋惡戯の隊長たる一等運轉士も驚いてしまつた。併し此儘にして置ては何處まで增長するか解らないといふので、何か適當な手段を講じなくてはなるまいといつて居た。

R——既も他の汽船と同じやうに、鼠の奴が惡戯をするので困却つて居た。殊に甚しいのになると、吾々が當直して居る船橋へまで駈上る。彼等は船橋に當直士官の食ひ殘したサンドウチッチのあることを能く知つて居て、それを奪ふ爲せんがために斯る冒險を敢てするので、操舵手が居やうが當直士官が居やうが、そんな事には頓着することができなかつたのだ。月明の夜は勿論、さうでなくとも能く冴えた晩には、甲板を駈け廻はる鼠を一々指摘することができる程で、北大膳極まるチッ公の行動には驚かざるを得なかつた。

靜かな夜、船橋で當直して居ると、自然に他きが來て欠伸が出る。で、吾々は退窟凌ぎに毎度鼠退治を行る。それは船橋備付の防火用桶に水を一杯容れて置て、鼠を見たらそいつを突如ぶッかけてやるのだ。若し旨くかゝると水の勢ひで鼠の體は船外へ押流されてしまふ。流された鼠は下で口を開けて待つて居る沙魚の餌食になるのだが、慣れると却々面白いので、吾々はそいつを盛に行

つたものだ。

處が此鼠狩から計らず面白いことが持上つた。或晩のこと一等運轉士と自分と當直して居ると、例に依つて鼠が猛烈に來襲する。そこで一等運轉士が右舷自分が左舷と二手に分れ、恰度チロ〳〵と兩舷に現はれた鼠を目掛けて、ザアとバケツの水をぶちまけると、折もあらうに其下に船長と船醫が兩舷に分れて船橋の樣子を覗つて居たので、二人は一等運轉士と自分のぶちまけた水を頭からイヤといふ程浴びた。

船醫は有繋にきまりが惡かつたと見え、鼠の身代りに濡鼠のやうになり、逃々の體で自分の船室に逃げ込んだが、船長は却々押が強いだけあつてノコ〳〵船橋に上つて來た。

「君達は何故這麼亂暴なことをするか。」とプン〳〵怒つて居る。

「やア是はどうも。スルト船長は船橋下に居られたんですね。失敬しました。

決して故意にしたんぢやアないので、實は鼠の奴が除り暴れ廻はるので、吾々は仕度斯うして奴等を退治するのです。それに船長が今時あんな處に居られやうとは氣が付きませんからなア。エイさうぢやアありませんか。是が荒天とでもいへば、そりやア不時に船内から上甲板まで巡視する必要もありませうが、就中今夜のやうな靜穩の晩に、何も物好きに此近處を警戒されるにも及びますまい。と思ふものだからツイ氣付かずに行つたので、決して貴君や船醫の頭から水を浴びせ掛けやうなどゝいふ惡意があつた譯ではないのです。」と一等運轉士は寧ろ船長を責めるやうにいつた。

斯う一本突込まれると、如何に厄病神第一世でも再びグッの音も出ない。

「イヤさういふ譯だつたか、それなら構はないけれども、乃公は又故意とあんなことをしたかと思つたのぢや。」

船長は這麼事をいつてお茶を濁し、嚥て下へ降りて行つたが、それからとい

ふものは船長も餘程自らを顧みるやうになつた。と同時に船醫も船室にばかり閉籠つて、無闇に上甲板や船橋へなど進出さなかつた。

I氏の談話は是で終りだが、それにしても、是が非實だとすれば、滑稽なやうな氣の毒なやうな隨分風變りな話である。

(八) 新聞利用の成功

セシルローズの邸宅を見る——珍奇なる銀樹——一週間百圓の下宿料——出願拒絶——ケープタイムス主筆と語る——吉谷氏悲觀す——官衙の態度一變す——三個月間旅行の許可

ケープタウンに着いた頃は、恰度南亞の降雨期の、一日平均五六時間は毎日雨が降るので、非常陶しいのにはホト〳〵閉口してしまつた。併し幸にして在留日本人で古屋といふ雜貨商店主の厚意で、ケープタウン滯在中其家へ宿泊することを承諾されたので大に助かつた。

其當時の在留日本人は古屋君と合せて二十人内外で、此中に三人婦人が混つて居たのは、敢て珍しくも何ともないが、何處へ行つても日本婦人が一種の發展を盛にやつてるのには驚かざるを得ない。

恰度英杜戰爭が濟んで間もない時であつたから、秩序なども多少雜然たる點がないでもなかつたが、有繋は英國の殖民地だけあつて、總ての施設には生々たる發展の色彩が現はれて居た。

着い翌た日彼の有名なるセシルローズ氏の邸宅を見るべく、市外二哩の地にロンデブシ村を訪れた。南亞無冠の帝王とまで謳はれた大人傑の邸宅として必ずしも堂々たるものではないが、其邸前の鐵檻に牝牡の獅子が飼養してあるところは、慥かに一種雄偉の追懷を故人の上に抱かしむる。實にや獅子月明に咆ゆるとき、セシルローズが靈は遙か泉下に微笑むであらう。英雄の肉は朽ちたけれども、其殘して逝つた南亞は益々偉大なる發達を遂げんとしつゝあるの

だ。彼は安心して平和なる永遠の眠に就くべきである。

此邸宅の附近には銀樹といふのがある。是は鑽んで字の如く葉が真白にピカ〳〵光るので、南亞諸國にも珍しいので、況して世界の他の地方には何處にもない珍木である。

其翌日ケープ殖民地官廳に出頭して、杜國旅行免狀の下附願を差出した。それは途中キンバレーの金剛石產地を見て、有名なるヨハネスブルグの金坑を見んがためであつた。

旅行免狀の下附願には、本人の外に保證人が二人入用なので、一人は古屋君に一人は倫敦から紹介されたケープタウンの英人某氏とに依頼して署名して貰つて出すには出したが、許否の通牒があるまでには二週間もかゝるといふので一先づ古屋君の家に引取つて何分の指令を待つことにした。

處がケープタウンといふ處は恐しく物價の高い處で、非常に儉約しても一日

二圓五十錢乃至五圓は要るので、止むを得ず古屋君の周旋で二週間働くことにきめた。是で漸く息吐くことができたが、下流さへ斯の如き有樣だから、中流社會では一人一週間どうしても八十圓乃至百圓の下宿料は要る。況んや上流社會に於てをやで、其當時でも生活難の壓迫を被りつゝある市民が決して少なくはなかつた。

斯の如き有樣で商業の經營も却々困難であるところから、自然生活程度の低い亞細亞人種の入り込むことを喜ばない。例へば日人が一圓で賣るものならば印度人や支那人は九十錢か八十五錢に賣ることができるといふ有樣だから、若し用捨なく是等のお手輕民族が侵入した日には、英人の商業家は競爭ができなくなるので、其保護政策として例の當所の殖民大臣チエンバーレン氏が、無闇に亞細亞人の排斥を企てたので、さてこそ吾輩が前々からケープタウン上陸に危惧の念を抱いた譯である。尤も其外に風俗習慣宗教の相違及び亞細亞人種を

侮辱した意味もあつたには相違ないが、主要なる排斥理由は商業競爭の不可能といふことを氣遣つたに過ぎないのである。

それから一週間程經つと厚い封筒に入つた書狀が屆いた。古谷君などは傍から屹度旅券が入つてるんだといふ、吾輩も又恐らくさうであらうと思つた。併しながらまだそれを的確に信ずることだけの勇氣はなかつた。何のことはない、浦島が玉手箱を開けるときのやうなこゝろもちで、兎に角思ひきつて開封して見ると、待設けた旅券と思ひの外、無殘やタイプライターで書いた難及絶賞といふ文句で、吾輩は此時さながら赤銹になつた槍及で胸をグザとばかりに貫かれたやうに思ふた。

吾輩は是で大に失望してしまつた。古谷君も再度の出願は無益だから絶望し玉へといふ。考へて見ると成程それも道理である。さりながら更に深く考へ直して見ると、折角萬難を排して此處まで來たものが、是位の障害でオメ〳〵

と逆戻りができやうか。餘人はイザ知らず、吾中村直吉は斷じて初志を飜すことはできない。勇往だ！　邁進だ！　南亞の官憲何するものぞ、烈々たる勇氣の焔は前途に横はる總ての障害を燒き盡して餘りあり、イザサラバ、孤杖更に漂然、面倒臭い旅券などに氣を屬らせず、大手を振つて南亞の天地を横行活歩してやらう。で、折う決心して既に出發しやうとしたが、要するに是は最後の決心である、して見れば是を輕々しく實行する譯に行かない。そこで一旦ケープタウンの當該官憲を訪問して、何故に吾輩の杜國旅行が不許可になつたかといふことを詰問して見た。スルト君の出願を却下したのは杜　國の官憲で、ケープ殖民地官憲の責任でないから答辯の限りにあらずといふて取合はぬ。成程さういはれて見れば仕方がない。そこで方法を換えて殖民地總督を訪問して色々事情を訴へて便宜を與へて貰いたいといふことを話して見たが、ケープ殖民地の中ならば自分の一存で喜んで旅行に便宜を提供するけれども、遺憾なが

ら杜國は所轄が違つて居るから、自分の口出しをする餘地がないので御免を被りたいといふ。

斯うなると愈々絶望だ。何も日本人が旅行したからといつて國土が汚れる譯でも滅る譯でもあるまいに、何たる頑迷不靈な輩どもであらう、三十有餘年の昔、日本の鎖國を打破つたのは矢張り卿等の母國の手に依つての仕事ではないか。然るに其日本が何れの邦國何れの人種にも、一視同仁的に門戸を開放して居るにも係らず、文明とか蜂の頭とか平常から豪さうなことばかりいふ而も亦將中の英人でありながら、公明正大な目的を以て旅行する吾輩の入國を拒むといふが如きは、イヤハヤ實に言語道斷な次第である。一體で赤縣共の亞細亞人種に對する考がまるで間違つて居る。五千年來立派な歴史を有する吾等同胞が、今尚ほ日常の風俗習慣の上に往古の蠱風を遺しつゝある赤縣人種に劣れりといふが如きは、世界の道德から論じても許すべきことでない。然るに彼等は

自ら居ること高く、常に吾等東洋人を眼下に見下して得々たるものがある。何と不屈千萬ではないか。

吾輩は殖民地總督の冷淡なる謝絶に返さん言葉もなく、心の中では愈々斷然入國と定めて、嫌て其官廳を辭し去つたが、途中でフト新聞利用といふことに氣付いたので、其足で直ぐ南亞殖民地でも勢力あるケープタイムス社を訪問して、其主筆に面會を求めると、早速會つてくれたので、最初旅行の目的から今迄の旅程中に起つた重な出來事などを物語り、それから杜國旅行が禁ぜられた一伍一什を打明け、最後に貴紙の力に依つて局面に何等かの發展を見たいものであるといふと、快活な主筆は熱心に耳傾けて聞いて居たが、グッと呑込んで、さういふ譯なら宜しい僕が一つ盡力して何とか君の便利を計つてあげませうが、それにしても南亞の英國官憲が、君のやうな尊敬すべき旅行家に對し、斯の如き冷淡な態度を取るといふのは甚だ失體であると、有繋は非理を解する

新聞記者だけに大に吾輩に力を付けてくれた。

タイムス社を出たときは、何だか片荷卸したやうな氣がした。で、其日は古屋君の家に歸つて翌日取るものも取敢えずケープタイムスを取つて見ると、果せるかな吾輩の記事が數段に渉つて載せてある。そこで早速其新聞を持つて殖民地官廳を訪問した。それは最一度談判を試みるつもりであつたのだが、見知越の事務員に會ふと、此方から何も言ひ出さない前に、

『今朝君のことがタイムスに掲載したね。』といふから、吾輩得たり畏しと、萬事はあの通りだが、特別を以て旅券を下附して貰ふ譯には行くまいかといふと、

『成は旨く行くかも知れません。兎に角暫く待つて下さい。』といひ乘てゝ奥の方へ行つたと思ふと、暫く經つて出て來て、

『今日のことにはならないから明日の十一時頃來て見て下さい。さうすれば何

とか御返事ができるでせうから。』といふので、こいつは何だか脈がありさうだ哩と思ひながら、其日は引退がつて古谷君の家に歸つた。

で、翌日約束の時間に行つて見ると、前日の男が出て來て、

『此處で便宜上旅券を出すことになりましたから、暫らく待つて下さい。』といふ。

吾輩是を聞くと同時に天にでも登るやうな心持がした。と同時に新聞紙の勢力といふものが如何に強いものであるかといふことに就て、誠に得難い適切なる證據を握つたやうな氣がした。

嚮て旅券は下附された。見ると南亞の英領諸國は何國でも自由に旅行して差閊ない、但し其期間は三箇月を超ゆべからずといふ文句だ。

期限を定められたのは餘り難有くないが、何有元々三箇月も躊躇して居られる身でないから、そんなことは一向構はぬ、唯肝腎な旅券さへくれゝば早速を

、、、さらばをきめるまでだと、直ぐに取つて返して古谷君にも此事を話すと、是も非常に喜んでくれた、吾輩には盆と正月が一所に來たやうな騷ぎ！

斯ういふ風に諦が解つて見ると、別に何もいふことはないが、一寸此處で不思議に思つたのは、疑きに旅券下附の出願を杜國の英國官憲に向けてして、それが一週間の後に願意聽屆け難しで突返されたのはよいとして、一度吾輩のことがタイムスへ掲載られたといふと、たつた一日でケープ殖民地の官憲から容易に旅券を下附したことである。而も同じ官廳の當該官吏及び殖民地總督までが、所轄外を楯にして一旦我輩の希望を斷乎として拒絶したのであつて見れば、どうしても北廳から旅券の下附さるべき道理はないのである。併し事實は事實で、吾輩の旅券は殖民地官憲から貰つたに相違ないのだが、吾輩の考へるには疑きに提出した旅費下附の願書は、肝腎の杜國官憲に屆かない前に、殖民地官憲で握潰されてしまつたのであるらしい。といふのは直に隣家が

ケープタウン郵便電信局で、どうも此局と殖民地官廳との間で宜敷やられたのであるとしか思はれぬ。で、願書は一週間ばかり留置を喰つて、然る後に杜國へ屆いた振を裝ふて突返されてしまつたのである。

尤も以上は吾輩の想像である。併し當らずと雖も遠からずであると考へられるので、斯くまで馬鹿にされるかと思ふと、自分は結局人間並の取扱を受けたからよいやうなものゝ、亞細亞人種としての立場からは、斯の如き横暴なる英國官憲の處置を輕々しく看過することはできないのである。

(九) キンバレーの金剛石鑛

黑人壓迫さる——人道上の一大缺點——珈琲一杯二十四錢——寶木金
四億萬圓の大會社——金剛石は印度に發見された——南亞一番の產額
六百萬圓——世界一のカリナン——人造金剛石——擬物の實質盛なり

明治三十六年五月二十八日、午後二時三十分ケープタウン發、鐵路キンバレ

ーに向ふ。

ケープタウンの停車場で一寸驚いたことがある。それは白人の乘る車室と黑人の乘る車室が區別されてあることで、黑人用のは列車の側面に白い文字で、"NEG" と書いてある從つて同じ三等列車でも黑人用はどうして粗末である。そんなら貧金でも安いかといへば强ちさうでもないので、矢張り白人と同額を拂はなければならぬ。

吾輩は所謂文明國の壓迫を被つた黑人はミゼラブルなものだと思つた。吾輩は此事實に就き世界人道のために論議したい。白人と黑人と人類としての絶對價にどれだけの相違があるかを。平常識者面をすることの好きな英人に聞きたいと思ふのである。若し此事に就て明白な答を聞くことができたならば、吾輩は自ら改むるに吝なるものでない。が、不幸にしてそれができないといふならば、殘念ながら南亞の英人に對する吾輩の尊敬を取消さなければならぬ。

それは兎に角黑人が白人と同等の社會的地位を占めることができないとしても、車室を異にしてまで酷遇する必要が何處にあるか。彼等は憐れむべき弱者ではないか。吾輩は賢明なる英人が今少し此點に留意して、彼等黑人を撫育し出來得るだけ彼等の福祉を增すことに力めることを望んで止まぬ。

列車の窓から有名なるテーブルマウンテンが見える。山頂が平たくなつて居て一寸奇觀である。六時頃から雨が降り出した。恰度南亞の冬期で、天涯萬里、有繋に寒さが身にしみる。

軌道の傍に處々小麥袋に砂を盛つて造つた砲台のやうなものがある。いづれ南亞戰役の遺物であらうが、茫漠たる大平野の眞中に土饅頭のやうにポツリポツリと立つてる有樣は如何にも淋しげである。

翌朝オレンヂ、リバー停車場に着いた。空は晴れたが間もなく朝霧が深く立ち罩めて、大陸の天地は濛々たる幕で掩はれた。發車に少しばかり間があるの

で、下車して珈琲を一杯飲むと六片（我二十四錢）取られた。是で見ても南亞の諸物價が如何に高いかゝ解る。

ライト河を渡り、モデル、リバー村を過ぎ、午前十時キンバレーに着いた。ケープタウンから六百四十七哩、此乘車賃金二磅十三志十一片（我二十六圓六十八錢位）也。

キンバレーといへば大府大きな都會でゝもありそうだが、決してそれ程の土地ではない。唯此處から金剛石が產るのが見物位なもので、人口五萬といふ評判だが、其内多少缺けるかも知れない。併し此位の處に資本金四億萬圓の會社が四つもあるから驚かざるを得ない。で、それ等が悉く金剛石採掘業を營んで居るが、是に依つて之を見ると、如何に其事業が大規模であるかゝ解る。

吾輩の見たのはデヘヤース會社の金剛石坑で、支配人ピックリング氏の好意で、精敏場内を案内して貰つた。併しそれ程の大々的會社でありながら、職工

乃至坑夫といふやうな者の數は少ない。吾輩の見た當時で白人が二百人黑人が三百人位なものであつた。僅か其位の人間で四億萬圓の會社が、十分に利益を獲て行くことができるから、今更のやうに金剛石の値の貴いことが知られる。

坑夫の賃金は地下作業で、白人十六志八片、黑人五志、地上作業で白人五磅（一週）黑人三磅（一週）である。

斯の如き高い賃金を得る坑夫の仕事はどんなものかと思つて、先づ案内者に從つて或堅坑を見に行つた。一體此會社は相當な地位ある人の紹介狀を持つて行かなければ、決して坑を見せぬことにして居るが、吾輩には特に紹介狀無しで見せてくれたのだから、此事は先づ會社の理事者に感謝して置かねばならぬ。

採掘作業は普通の鑛山作業と少しも異つたことはない。此地方は一望千里際涯なき平地であるから、坑は悉く堅である。所謂堅坑といふやつだ。深さは隨

分深い。就中最も深い坑になると四千二百呎もあるといふことだ。

坑夫の出入鑛石の坑外運搬は悉く電動機で、敏捷に且つ安全にやつて居る。吾輩も箱に乘つて坑の中へ降つて見たが、何だか生濕くて蒸殺されるやうであつたから、間もなく坑外に揚げて貰つたが、坑夫等は鼻謠歌ひながら、カチン〳〵岩を碎いて居る。

吾輩は坑の中が金剛石の光輝で眩いであらうと思つたが、そんな樣子は少しもなかつた。大體肝腎な金剛石が何處にあるんだか皆目知れない。聞けば碎いた鑛石を運び出した上で、それを又更に細かく碎いて金剛石を搜すのださうな。大きなやつでも小さいやつでも飛出せばよいが、假令無かつたにしたところが腹は立てられぬ。かるが故に坑内では、唯汚い岩がゴロ〳〵して居るばかりで、此中から貴重なる金剛石が出るとはどうしても思へない。併し事實それが出るから不思議である。日本にも此位な金剛石坑が十ばかりもあつたら、多少

細つた金になるだらうにと思つて見たが追付かない。唯々呆氣に取られて第三工場の方へ行つて見ると、其處には四浬も隔つた坑から運搬されたばかりの鑛石が累々と積まれてあつて、多くの職工がそれ等を一々一寸立方位の大きさに碎いて水で洗ふ。スルト今度はそれを第三工場に同じくトロッコで運搬するのだが、第三工場の職工は第二工場のやうに荒呉淡ではなくて、大勢の女工が金槌を持つて坑石を更に細かく碎いて金剛石を搜して居る。で、若し金剛石があつたらそれを傍の容器に入れて、更に又新しい鑛石に鐵槌を加へるのである。

斯くして得られたる金剛石は、之を璞石の儘和蘭に送つて磨きにかける。スルト其處で初めて寶玉商の店頭にあるやうな見事なものになるのだ。

そこで金剛石に就て些しばかり御講釋申さう。參考として强ち無益な企てゝはあるまいと思ふ。

金剛石は一般に天然的に河床の砂利、礫又は礫石、結晶片岩、深成岩の中に

含まれて居るから、谿谷、河床、原野の砂土中から採掘することができる。又他の金屬のやうに堅若くは横の坑を掘つて採掘することもできるのである。

金剛石は昔印度で發見されたもので、現今でも印度から產出するが、南亞に金剛石坑が發見されてからは、全世界產額の九割五分を此處から採掘するやうになつたので、他の地方は急に其聲名を墮してしまつた。

南亞に於ける金剛石坑は大抵上白堊邊を有せる地平地的皮殼を以て圍まれた約圓形狀の地積から成つて居る、そして其表面は帶赤色の砂礫土を以て覆かれ、其上に石灰質凝灰炭或は炭酸石灰床で圍まれて居る。で、此層に交叉せる火山岩脈があつて所々堅鏈狀をなし、其巖頭部は分解又は酸化し黃い土のやうになつて居る。そして金剛石は帶青色岩の下部に最も多く含まれて居るので、或人は帶青色岩脈を以て金剛石脈と稱へて居る位である。

此地方の金剛石は大抵は變曲狀を有する蝕像の如き八面體の結晶で、其表

面は稍々油樣の光澤を帶び、帶綠色蛇紋石の如き角礫岩にて包まれて居る。で同じく金剛石と一所に包まれて居る中には、變質厚岩の碎片、クロム柘榴石、美綠色透輝石、磁鐵鑛、チタン鐵鑛、重晶石、角閃石等がある。

前に述べた通り南亞には四個の大金剛石坑がある。それはデベヤース、デユトイツパン、キンバレー、パルトホンテン是なりである。就中キンバレーが最も大規模で且つ石質が良好である。

少し統計が古くて恐入るが、千八百九十年三月の調べに依ると、以上四坑の一年產額百六十萬八千八百三十カラットで、此價格五百二十八萬三千百十四圓である。無論現今は是に數倍するであらうが、世界の人心が益々贅澤に傾いて行く以上は、南亞の金剛石採掘事業は前途益々有望と謂ふべしである。

金剛石鑛千六百封度中に含有する金剛石平均量大凡そ左の如しだ。

キンバレー　1½——1¼カラット

ヂベヤース　1——1½カラット
デユトクツパン　1——1½カラット
バルトホンテン　1½——1¾カラット

即はちキンバレー產の鑛石が最も含量が大きい。

金剛石は濠洲ニユウサウスウエールス地方にも產出せるが、千九百二年の統計で見ると、一萬一千九百九十五カラットで、此價格が十一萬三千二百六十圓である、此地方は主として沖積層中から掘出される。

ブラジルではミナスヴレス洲ヂイアマンチナが中心地で、主に花崗石中に含まれて居るが、又砂岩礫岩中から發見されることもある。千九百三年の統計で見ると、一箇月凡そ二千五百カラットを產して居る。價格は〇、七五カラットまでは以上は一カラットに付て四十八圓、〇、七五カラット以下〇、五カラットまでは一カラット十四圓五十錢〇、五カラット以下は一カラット五圓五十錢の割合で

ある。此地方で千九百一年に發見された五百七十七カラットの金剛石は、三萬四千七百六十圓に賣れたさうである。

東洋では印度とそれから東ボルネオにも產出する。其產出額は千八百九十八カラット乃至千九百五十カラットである。

餘程以前は河流又は平地の土砂を掘つて之を淘汰して初めて金剛石を得たものであるが、現今ではそれが普通の鑛業と些しも異らなくなつたのは、採掘上の一大革命といはなければならぬ。

千九百二年北米アリゾナ洲ヂアブル峽谷に於て發見された鑛石中に金剛石を含んで居たのは珍しいといはなければならぬ。形もかなり大きく加之質が非常に硬かつたので、之を磨くために二本の鑿と一個のエメリー輪轉機を破壞したといふことである。

金剛石は通常一個づゝ獨立した結晶で、形は一般に極めて小さいが、中には

雀の卵位なのがある。

色は無色、黄色、赤色、橙黄色、青色、褐色、黑色等種々あるけれども、淡黄色が最も多いやうである。併し價の高いのは無色透明水の如きものであること無論である。

金剛石の成分が純粹の炭素であることは人も知る通りで、木炭と同じく熱したからといつて熔解しない。若し空氣を排斥して極めて高熱をかけると、重量を變ずることなく石墨若くはコークスに似たものになつてしまう。酸には決して作用されるやうなことはない。併し之を極度に熱すると燃燒する。そして炭酸瓦斯と硅酸若くは酸化鐵を含める少量の灰を殘す、就中黑色金剛石を燃燒した場合が一番此灰が多く殘る。

比重は純粹なるものであつて三、五である。カーボナートで三、一、而して萬物中最も硬いものである。

金剛石は坑にある時からピカ〳〵光るかといふと決してさうでない。坑から採掘したてはたとこころ餘り綺麗なものでない。併しそれを器械にかけて磨くと、あのやうに眩いばかりに輝くやうになる。現今金剛石の磨き方の一番上手な處は、和蘭のアムステルダムである。

同じ金剛石でも結晶が明らかでなく、寧ろ多く圓形をなして居るものがあるが、是等はボルトといつて硬度は強いが比重は却つて低い。又黑金剛石は此ボルトより尙ほ硬く、普通ブラジルのバイア地方で、此種中の良品が採掘されるといふことだ。で、此黑金剛石は時として小さい塊狀をなして河流中の石礫に混じて居るさうだが、用途は穿岩機、硝子切、又は金剛石鋸の齒に用ひられ、其細末は總ての寶石を琢磨する時に使用される。

金剛石も却々大きいのが時々發見される。千九百五年トランスバールのプレトリア附近で採掘したのは三千三十二カラットあつたといふことだ。カリナ

ンと名づけられたが、恐らく世界中で最も大なる金剛石であらう。

昔から有名な金剛石が數々あるが、就中葡萄牙王の王冠を飾つたブレガンザといふ千七百四十一カラットのものであらう。ブラジルで發見されたのであるのだが、其當時は千八百八十カラットあつたといふ。つまり磨きにかけた爲めにそれだけ減つたのである。之に次ぐものはボハボロ島酋長の有つて居る三百六十七カラットのであらう。故ヴヰクトリヤ女皇の王冠を飾つた金剛石は、コヒヌアといつて有名なものだが、昔の七百九十三カラットが減つて、現今は漸く百六カラットとかないさうである。此金剛石は四五十年前和蘭の一商人が南亞に旅行した時、土地の黒奴が有つて居たのを、僅かに牛羊と交換して持歸つたのであるさうだ。其外埃太利皇室のフルレンチン、露國宮廷のオルロフ等も有名であるが、千八百九十三年オレンヂ殖民地のヤーゲルスフオンタイン坑で採掘したのは、無色透明で瑛石の大きさ縦横共に三吋で九百七十一カラットあ

つて千萬圓まで見積られたといふ珍品である。

帶色金剛石の品位は次の如しである。

一、紅色金剛石
二、綠色金剛石
三、青色金剛石

尙ほ此外にもあるが大略此通りである。

紅色金剛石中薔薇色のは多くあるが、紅色の濃いのは稀である。先年ボルネオから非常に美麗な紅色金剛石を採掘したことがあるといふことであつたが、間もなく巴里で異常の高値を以て買收られた。

綠色金剛石は牛つてエメラルドの一部から發見されたのを、或英人が手に入れてそれを埃太利人に賣つた。スルト其男が倫敦でそれを二千圓に賣り飛ばし、其後二三者の手を轉賣したが、其度毎に價格が上つて、今では一萬圓でも

手放さぬといつて或男が大事にして居るさうだ。

ドレスデン府にあるグローネグウアーブトといふ綠色金剛石は、三十萬圓の價格に評定された。吾輩も遺憾のを十ばかり拾ひたいと思つたが、如何に南亞金剛石の產地でも、終に一箇をも手に入れることがでないかつた。呵々！

青色金剛石は比較的澤山あるが、透明でないためにどうも品位が餘り高くない。

此青色金剛石で最も上等なのは蓋し印度に於て發見されたのであらう。瑛石の儘で百十二カラット四分の一あつたさうだが、ターバニア人の手から路易十四世が買つて磨かせたら六十七カラットに減つたさうだ。

佛蘭西の或王が青色金剛石の大きいのを有つて居たさうだが、不思議にもそれが突然千七百九十二年に行衛不明になつたさうだ。

處が千八百三十年になつて、前記の金剛石と同色のものが、ホープダイヤモ

ンドと名づけられて現はれ、是はブリアント形に磨かれたが、重量は四十四カラット四分の一あつた。其後間もなく之と同質同色の六カラット二分の一ある金剛石が、ゼネバに於て賣買され、又巴里に於ける一英人が前記の金剛石と同質同色で一カラットあるのを三千圓で買つたといふことであるが、それ等は悉く千七百九十二年忽然として姿を隱した不思議な金剛石の一部分ではなかつたらうかといふので、一時喧しく世間の噂に上つたことがある。

そこで參考のためにカラットといふ言葉を說明するが、此言葉には二樣の意義があるので、冶金家の使用するカラットと、寶石家の所謂カラットとは同じものでないのである。

冶金家は純金を廿四カラットとする。で、是に銀又は銅を加へたとき、例へば金十八に銀六の場合には、之を人も知る如く十八カラットといひ、金十四銀八のときは十四金といふが、寶石家のカラットは之と趣を異にして居る。尤

も寶石のカラットと雖も、各國多少の相違はあるが、先づ左記の四箇國でいふカラットは次の如くである。

埃太利	(我五厘四九四六)	
獨逸	(我五厘四七九六)	
佛蘭西	(我五厘四八九二)	
英吉利	(我五厘四七三二)	

即ち一カラットといふ重量は極めて僅少なものである。

一カラットの價格は無論品質の善惡に依つて異つて居る。無色透明なもの即はち上等な品になると、璞石の儘で四十四圓、精磨して二百二十五圓乃至二百五十圓である。で、一カラット以上の重量あるものゝ價格は、一カラットの價格に其品の有するカラットの數の自乘數を乘じたものに近い。即はち二カラットあるものならば、四十四圓に二の自乘積四を乘じたもの百七十六圓に近いの

である。

金剛石を人造し得るや否やといふ問題は、何人に取つても極めて興味ある問題である。で、先づ果して人造し得るや否やといふならば、それは慥かに人造することができるので、現に其證據を示した人があるのである。

世界の人類が金剛石といふものを發見したのは、今を距ること幾百年前か知らないが、此貴重なる寶石を今少し潤澤に得たいといふ人間自然の慾求からして、人造金剛石に想到した人間は昔から決して少くはなかつたであらう。が、果して此横着極まる理想が實現されるやうになつたから驚くではないか。

固より金剛石が純粹の炭素であるといふことが明白である以上、人造金剛石問題の如きは何時も解決されべき運命を擔つたものといつて然るべきではあるが、それでも此疑問に一點の光明を與へたのは、また左程昔のことではないので、千八百八十年ハンネーといふ人が、鐵管中にパラピン油、油煙炭、少量のリ

チウム等を容れ、之に強熱を加へて金剛石の結晶を得たのが抑も最初である。

ハンネー氏の外にシドニー、マルスデン氏も又他の方法に依つて同じ結果を得たが、いづれも極めて微少なる黑色カーボナードに過ぎなかつたので、問題解決には未だ以て充分といふことはできなかつた。

然るに其後佛國のヘンリ、モアサン氏が發明した方法に依つて、稍々完全に近い結果を得ることができて、人造金剛石問題に一大光明を與へることになつた。

一體鐵といふものは熱すると炭素を吸收し、冷却すれば再び其炭素を結晶し若くは粒狀をして分離する性質を有するものである。モアサン氏は鐵の此特質に思ひ付いて、初めて試驗に取掛つて見た。で、高溫度に於て鮮鐵に炭素を飽和させて冷却したところが、案の定結晶質の石墨ができたので、氏は直ちに下の如き試驗に一歩を進めた。

軟鐵を半封度ばかり坩堝に入れ、之れを電氣爐で凡そ攝氏三千度の高熱を加へて熔解せしめ、其内へ別に軟鐵筒中に砂糖炭を充たしたものを入れると、鐵は全く炭素と飽和する、此時坩堝を取出して冷水中に入れ、鐵を暗紅色になる程度に冷却し、水から取出して空中で自然に冷却させるのだ。スルト鐵は外面に殼皮ができる。そして内部の鐵汁が凝固せんとして非常な壓力を生ずるので、炭素は此高壓のために結晶して玆に初めて金剛石ができるのである。

斯の如くにしてできた金剛石は、鐵を鹽酸に溶解せしめて取出すことができるので、其結晶の多くはカーボナードであるが、極めて僅小の部分は無色透明の金剛石で、顯微鏡下に照して見ても、天然のそれと總ての點に於て些しも違つて居らぬ。唯惜しむらくは極めて形が少さいために實用に適するまでに至らぬといふ一事である。

で、是等の人造金剛石と雖も、實質に於て眞正の金剛石と異らないが、玆に

金剛石の擬造品があるなら却々油断はできぬ。普通プリストル金剛石又はアイルランド金剛石といふ如きは、水晶を巧みに磨き上げたので、強ち専門家でなくとも其強度光澤を見て、直ちに擬物であることが解るけれども、巴里金剛石といふやつは熟練なる鑑識家と雖も、往々其眞擬を見誤まることがある程巧みに製造されてある。

本場の専門家でさへ是がためには一杯喰はされるもの、況んや世界の田舍者たる東京人士の中には、隨分是等の擬物を掴つて得意然と構へる奴が澤山あるだらうと思ふ。殊に成上りの似而非紳士貴婦人等が、指環だの襟止だのへ候め込んで、是見よがしに光らかしてるかと思ふと、今にも歯が浮き出しさうだテ。現に東京ではない世界の虚榮と虚飾を、集められるだけ集めたといふ巴里にさへ、此擬金剛石の需要者が少くないと見えて、四個の大會社は多數の職工を使役し、盛に是が製造に從事して居る。で、其製品は奸商の手に依つて眞正品と

して取扱はれるのだ。ボヘミヤ邊りにも數個所に會社があつて、巴里と同じく怪しかる擬物を製造して居る。是等の製品は硬度が低い樣り、其光澤に於て將又比重に於て、眞正品と些しの差がないとは、擬物の巧妙も又三嘆に値するではないか。

（十）金剛石の秘密賣買

金剛石は落ちて居ない＝不正賣買は三年の懲役＝慈深速は用心が第一だ＝警察の回課＝利益は莫大だ＝オレンジ自由國の國境＝強盜豫防の好策

時と金にさへ不自由しなければキンバレーも見物すべし決して無價値な處ではないが、無錢旅行家としての吾輩には、三四日の滯在ですら既に困難であるところから、早々出發してトランスバールのヨハネスグに向つて出發することにした。

其前に一寸忘れたことを書き加へて置く。といふのは外の事でもないが、普通素人の考に依つて、キンバレーに行けば金剛石の一つ位拾へさうなものであるが、サテ實際は却々さう旨く行かない。

ズット以前には坑夫などが盜んだものを、秘密に買つて莫大の利益を占めたものが多くあつたさうだ。イヤ今でも全然其跡を絶つたとはいへまいが、殖民地官憲は是等不正商人に對する刑罰として三年の懲役を申付けるのである。イヤ買つたものばかりでない賣つたものも同罪であるが、人間といふものは慾の皮の突張つたもので、一寸見てさい飛付きたいと思ふやうな金剛石（無論まだ磨きにかけないもの）を殆んど無代價同樣に買つてくれないかといつて突付けられるときには、誰しも之を買はずには居られない。が、若しそれを買つたところを見付けられやうものなら、前にいつた通り忽ち三年の懲役に投り込まれるのだから餘程危險である。

東京でも主として雜閙する神田や本郷の大通りの、燈盞下暗しといつたやうな路次口から春畫を賣る怪しかる奴が飛出すやうに、キンバレーでも黑人などが、土地慣れぬ新來者などを見付けて、物陰から聲をかけるやうなのがあるがそれ等は屹度金剛石を買つてくれで、自分で盜んで來たか、但しは又他の坑夫がごまかして來たのを請賣りしてるのか、孰れにしても間違なく不正品であるから、慾の深い連中は餘程警戒を要するのである。

で、一頃不正賣買者がはびこつた時代には、警察當局が間諜を使役つて犯人の檢舉に從事したものださうで、それは土人に金剛石を持たせ、探偵が黑幕になつて怪しいと思つた奴に、其金剛石を見せ付けさせる。無論探偵は遠く知れない處から此有樣を見て居て、若し相手がそれを買取る素振でも見せやうものなら、オイ貴樣一寸警察署まで來いといふことになる。だから初めは此手で專門の不正商人が時々捕まつたといふことである。

何しろ莫大の價格あるものを殆んど無代價同樣で買取るのだから、一派の不正商人の得る利益といふものは計り知るべからざるものがあつが、前にいつた通り一方に於て其筋の眼をくらます面倒があると同時に、是等不正商人に依つて衣食する一派の惡漢が居るのであるから、彼等の仕事も決して樂なものではないのである。ところで其惡漢といふのは、不正賣買といふ弱點を捉へて、彼等獨特の脅迫を行つて酒手をせしめるのだ。尙ほそればかりでなく、不正仲買人が其品物をオレンヂ自由國の國境に密輸送をする途中を掠して、其品物を强奪したり所持金を卷き上げたりする。それだから不正仲買人の苦心といふものも並大抵ではない。

併しながらそれは自業自得で、一方に於て彼等が探偵を暗殺したり毒殺したりしてまで惡事を働く正當なる罪報であるが、上には又上のあるもので、彼等不正商人の中稍々思慮に富んでる輩は、其眼の上の瘤たる惡漢の難を避けんが

ために、色々な手段を廻らして居る。それは惡漢原が何日頃には誰が密買金剛石を國境外に運ぶさうだといふことを見て取つて、直ちに途中に於て襲撃する用意に取掛ると、辛辣なる注意を忘らない彼不正商人は直ちに其計略の裏を掻く。何うするかといふと、總て是等の消息を審にせざる或人間を備ふて來て、大事さうに釘付けした小さい箱を渡して、是をオレンヂ自由國の國境まで持つて行つてくれ、さうすれば其處に或商人が待つて居て品物を受取るからといつて、乘馬だの短銃だのまで供給した上に、暗夜秘かにキンバレーを出發せしめる。スルト此奴はいはれた通りに馬に乘つて出發する。いふまでもなく、キンバレーとオレンヂ自由國の國境間は、馬上で僅々四五時間の道程であるから其造作もない仕事に對し非常に巨額の賃金が契約してあつて見れば、誰でも勢能く駈出さない譯には行かない。で、あのキンバレー附近の茫漠たる砂原を、馬の蹄に蹴散らしながら、低く垂れた南亞大陸の空の下を、只管國境へと急ぐ

途中を、物陰から現はれた怪しの漢子に襲はれて、多勢に無勢、頭部を殴られ氣絶までさせられた上に、携へ來つた釘付けの箱は勿論所持金まで卷き上げられるのである。

斯うなれば不正商人の目的は首尾能く達せられたので、其乘馬でキンバレーを出發した男が、途中で殺されやうが生かされやうが、そんなことには一向無頓着で、却つてサルーンで三鞭酒の盃位傾けて居るのだ。

それは何ういふ譯かといふと、大事さうに釘付けした小箱の中に貴重品あり と見せたのは眞赤な詐りで、其實中には小石が新聞紙に包んで容れてあるばかりである。それだから途中强奪されたからといつて、一向悲む必要はない譯で所持品や所持金を卷き上げられたのは運搬者の不運だ、例令大事の生命を亡くしたからといつて、賴んだ奴の懐には何等の影響も及ぼさない筈である。併し單に是だけでは彼等の魂膽が知れまいが、實は斯ういふ譯である。

馬に乘せて短銃まで持たせて本道から或一人を出發させると、それと同時に眞正の金剛石を容れた箱を持つた一人を、他の間道からオレンヂ自由國に向つて出發させる。スルト有繋に目から鼻に抜ける程鋭い惡漢等も、別仕立の本使者が間道を行つたとは氣が付かないので、本道を出發した方を襲撃して見ると意外にも箱の中は小石ばかりだらうといふのだから、彼等の失望や浦島の玉手箱以上で、地團太踏んで悔しがるが又如何ともする能はざるに至るのである。

斯の如く種々の危險や障害に打勝つて、巨萬の富を積んだ英人は決して拙くない。それ故にかなり長い間、此不正手段が首尾能く行はれたならば、假令事露現に及んで三年間牢獄に繋がれたところが、出獄後は立派に食つて行けやうといふもので、此一涙の雖に取つては寧ろ道廢刑罰は何でもないのである。

サテ是からキンバレーを出發しやう。

（十一）ジョハネスブルグの大金鑛

南亞の輕便鐵道――我利々々亡者の集まり――反動的沈滯――大抵は砂金坑だ――十九貫目餘の大金塊――海水中の含金泥――一日の賃金

十四

午後四時の列車で愈々出發といふことになつたが、此處からトランスバールに入るには至極不便で、デ、アール乘換驛まで逆戻りをしなければならぬ。此處で輕便鐵道に乘換へて、それから又ナーウ、ポート乘換驛で、ポート、エリサベス線に乘換へ、スプリングフオンタイン、クロンスタット、ヴルーンフオンタインといふやうな四千呎以上の高原にある諸驛を通過して、漸て目指すジョハネスブルグへと到着したのである。

ジョハネスブルグは人口三十五萬なる亞弗利加第一の大都會である。

其當時は恰度南亞戰爭の後で、何處も同じ一攫千金を夢みて入込んだ我利々

々亡者のために搔き廻はされて、市の總ての秩序が甚だしく亂世的であつた。殊に商業經營の如きは其打擊を被つて、反動的に著しく沈滯の悲境に陷つてしまつた。尙ほそればかりでなく勞働者の供給が過多になつて、賃金に大下落を來たしたため、雪崩を打つてやつて來た連中は大に失望してしまつた。さアなると二進も三進も行かぬ。雖奴も此奴も背い息を吐いて、怨めしさうに景氣の直るのを待つて居たが、中には又さうならない前にウンと儲けて、不景氣の風は何處を吹くかといふやうな顏をしてるのもあつた。

キンバレーとジョハネスブルグの間は八百哩で、二晝夜を要して居る。乘車賃金は二磅十七志で、邦貨の約二十四二十八錢に當る。無論三等の日本なら赤切符といふところである。

若しキンバレーとジョハネスブルグの間に汽車が直通すれば、二晝夜を要するのが僅に十二時間で濟むが、逆戻りをしたり輕便鐵道の厄介になつたりする

ために、其當時此兩市の交通は酷だ不便極まるものであつた。

キンバレーが金剛石で有名な如く、ジョハネスブルグは金鑛で評判になつて居る、そこで新た翌日フエレラスト會社の採掘工場を見學した。

此方面のは悉く砂金坑である。而も其面積が四十五萬方哩もあるといふから、全體としては却々廣いものである。從つて採掘に從事したる會社も前記フエレラストのみではないので、他にも隨分澤山あるといふことである。

一寸餘談に渉るが、砂金中には往々大なる純金塊を含んで居ることがある。今迄發見されたもので最も大きいのは、千八百五十四年米國カリホルニヤの或砂金地から出たもので、一個で十九貫四百二十二匁あつたといふことである。之に次ぐものは濠洲の某砂金坑で掘出された十六貫六百匁のもので、之は八萬圓で賣られた。日本では明治三十三年北海道の枝幸郡ウツタンナイ川の砂金床で拾はれたもので二百五匁あつた。是は一匁四圓七十錢で取引されたといふこ

とである。其後同郡トマイキ川の砂金床で百九十七匁七分のものを發見したさうだが、日本では先づ是等が有名なものである。

一體砂金といふものは主として板狀鱗狀苔狀をなして居るものであるが、河の上流に近い處から出るものは往々細毛狀をなして居るといふことだ。

砂金は普通河床から出るものだと信じられて居るが、ジョハネスブルグ附近のやうに大陸の地床から出るのもあれば、又海濱の砂中から出るものもある。此海濱の砂金を濱砂金と稱へる、處で其生成の理由であるが、或一說に依ると石英質なる含金鑛脈が風化して生じたる砂粒が、河水の作用に依つて運搬陶汰せられたもので、さては今日見るが如き鑛床を形造るやうになつたのである。併し此說に反對する人が往々ある。で、其人々の說に依ると、砂金床で發見せられる大金塊は山金の中では見ることができないから、砂金が普通の含金鑛脈が風化して其砂粒が河水に依つて運搬陶汰されたといふ說は眞でないと

いふのである。或はさうかも知れぬ。砂金地には十匁内外の金粒を發見することができるが、山金の金粒は肉眼で見ることはできない。加之砂金は山金に比して其品位が高いから、どうも山金とは直接の線故はないやうである。

それは兎に角茲に珍しい話がある。といふのは海水中に金を含んで居るといふことだ。ミユンステル氏はクリスチヤニヤ灣の海水一噸中に、〇、〇〇六瓦の金と〇、〇一九瓦の銀を含んで居るといつて居る。又或地の學者の濠洲の東海岸の海水には、〇、〇〇三瓦の金と〇、〇〇六瓦の銀を含んで居るといふことを報告して居るが、若し此說にして眞なりせば、一立方哩の海水中には百三十噸乃至二百六十噸の金を含んで居ることになる。併し今迄海水中から金を取る事業が起らぬところを見ると、却々人の知らぬ困難があると見える。

そこで話は再びジヨハネスブルグの段に戻るが、此處には金鑛の外有名なる大炭脈があるので、キンバレーと共に南阿の一大寶庫であるといつてよろしい。

南亞戰爭中一時事業を中止したが、平和克復後直ちに又採掘に着手しやうとすると、多くの勞働者が戰爭の打擊を被つて歐洲に歸つたゝめに、却々オイソレと仕事が始まらない。そこで歐洲の新聞を利用して、盛に勞働者募集を行つたものである。其當時の一日の賃金が一磅（邦貨十圓）といふのだから、蟻の甘きに集まるが如く吾も吾もと集まつて來た。で、初めの程は一日一磅を貰つて何の不平もなく切せと稼いで居たが、會社の方では人手が足りて來たので急に賃金を十五志に引下げた。

何しろ一日一磅といふ賃金は元々破天荒であるから、それが急に十五志に下つたときまではよかつたが、會社は勞働者が取立てゝ不平をいはないのをいゝことにして、又候十志に減らしてしまつたので、勞働者等は一時大に困難に遭遇した。それも賃金引下に比例して物價が低落でもしたら、或は無事に收まつたかも知れないが、まだ〳〵何も彼も眼の玉の飛出る程高價い時節であつ

たから、折角儲けに來て是では何にもならぬといふので、大抵の者がゾロゾロと欧洲に歸つたので、會社も今更のやうに吃驚し、再び十五志に引上げることを公告したが、前のことがあるから思つた程勞働者が集まつて來なかつたので、仕方なく南亞戰爭に從事した英軍の兵士が、解隊されて本國に歸らうといふのを引止め、十五志出して使役つて見たが、勝誇つた兵士等は氣位ばかり高くて出鼠合に働かぬところから、會社の方でもホト〳〵閉口してしまい、遂に賃金を十志に引下げたので、今度は其兵隊上りの連中までが本國へ歸つてしまつた。

さて斯うなると鑛主の方も何とかしなければ自滅するより外はないので、其筋に向つて亞細亞人種の愉入許可を出願した。ところが元來南亞に新歐羅巴を建設しやうといふ英國官憲は、にべなくも其出願を却下したので、茲に計らずも鑛主と官憲との間に大衝突を來たし、さしも大規模であつた事業も一時中絶するの止むなきに立至つた。

(十二) 南阿の白人は無賴漢である

久水領事侮辱さる——日本人は支那人と見做さる——日本領事は感心にナイフとフオークの使用法を知つて居る——土人は實際駄目だ——晉豐鑛主と會見した——仕方のない無格闘人

斯ういふ風に一時は官憲と鑛主との間に交渉が斷絶して居たが、白人が勞働しなければ土人を使用すればよいといふ官憲の主張を、鑛主例でどうしても容れなかつたために、それでは仕方がないから除外例を設けて亞細亞人種の入國を許さうといふことになつて來た。

當時此事を聞き傳へたゝめか、日本政府は新嘉坡在勤の久水領事を派遣して南亞の狀況を取調べさせた。

一行は久水領事の外に農商務省の勝部技師も居たが、何處も同じ戰後の殖民

地などゝいふものは、總ての秩序が亂れて居たゝめに、久水領事の一行はジョハネスブルグで甚だしく冷遇を受けた。

當時在留日本人としては僅か三人しか居なかつたゝめに、土地の人間の日本人に關する智識は零で、吾等日本人は自分でこそ大に威張つて居るが、少し譯の解らぬ赤猩と來ると、地球表面上に日本といふ邦國があるかないか知らない位で、大抵の奴が支那人と間違つて居るから憤慨に堪えぬ。大體日本人が米國で排斥されるなどは怪しかる話ではないか。事理を解せぬ米人だから、此方で相手にせぬといへばそれまでだが、移民事件に就て多大の屈辱を被つて居ながら、御無理御尤でペコ〳〵頭を下げて居る賢明なる外務當局を戴いて居る日本國民は實に不幸である。

まアそんなに自分でブリ〳〵憤つたて仕方がないが、吾輩の如き世界到る處に足を蹈込んで、到る處で日本人が馬鹿にされて居る實況を目擊したものは、

此際沈默つて居やうたつて居られるものでない。それも人間としての實價値に大なる差があればであるが、吾等日本人は決して彼のパタ臭い赤猩に劣つて居ないから、今後益々此種の憤りを發せずばなるまいと思ふ。

現に久水領事の如きは、社會の師表たるべき新聞紙に依つて侮辱されて居る。領事がダーバンからジョハネスブルグにやつて來ると、土地の新聞は色々の嘲弄的の文句を並べた末に『日本領事の顏は一見支那人に似て居るが、ホテルの食堂で見ると、不思議にもナイフやフォークを巧みに使つて居る。』などゝ無禮千萬なことをいつて得意がつて居た。

是には久水領事もいゝ心持はしなかつたであらう。果然、彼の政府に致した報告は寧ろ絶望的のものであつた。或は領事が土人の體格の頑健なのを見て、日本人が是に對して競爭することは不可能であると認めた故もあらうが、南阿を目して日本人の住ひべからざる地としたらば、土地の奴原の不心得なる待遇

と批評とが然らしめたのであることは疑を容れべき餘地がない。

さりなから久水領事が絶望的の報告をしたといふことは、吾輩にいはせると非常に殘念であつて、此報告のために日本人は慥かに適當なる働き場を失つたといつてよい。領事の見た土人は獰猛な顏色をして居て、如何にも强さうであるが、其實勞働者としての彼等は駄目である。到底日本人の敵でない。そこで一日吾輩は或鑛主と會見して、日本人輸入に就て意見を交換して見た。ルルト先方では喜んで日本勞働者を歡迎するといふ。それでは貸銀はどの位出すかと訊いて見ると、住宅だけを與へて五志出さうといふ。吾輩は直ちに其法外な申出を詰つた。白人に對して一磅を拂つたことがある。其半額としても十志である。實際勞働者としての價値になると、赤嬢雀決して日本人に及ばない。それ故に本來ならば日本人に一磅出す價値があるのだ。併し種々な事情のためにそれができないとしても、其半額の十志は寧ろ安値と思はなければなら

ぬ。

「そんな事ぢやア到底駄目ですね。日本人は君等が考へて居らるゝ程安ッぽい人間ではないですからな。一體ですね、君等が人間本來の能力を度外視して、人種に甲乙の等差を付けるといふことは間違つて居るです。吾輩考へるに君等は人間の使用法を知らない。一日一磅取る勞働者より、ヨリ遙かに忠實に敏活に有効に働き得る勞働者に、前者の貸銀の四分の一しか與へないといふやうな不合理極まることで、吾日東帝國の男子を迫廻はされるものと思つて居らるゝのは、偉大なる南阿の事業家としては、實に取つて返しの付かない大不覺です。」と吾輩思はず一本ウンと極め込んでやつた。

それから先方でも種々と辯解を試み、且つ又、成るべく安く日本勞働者を輸入しやうと力めたやうであつたけれども、どうも吾輩は主張と一致するのは困難であつた。併し結局一日六志として無論家屋を供給した上に、契約年限を

無事務め終つた曉には、日本からジョハネスブルグまでの往復旅費は會社で支辨するといふことに話は纏めて分れたが、是とて吾輩が責任を以て商議した譯でないから、其儘になつてしまつたやうなものゝ、日本人の出稼場所としては慥かによい所であつたのである。

南阿の英人にはスコットランド生れの奴が多い。で、彼等は大抵無學文盲で甚だ仕末が惡い、其癖亞細亞人といふと無闇に馬鹿にする弊がある。或時酒場で日本人が酒を飲んで居ると、

『オイお前は支那人か。』といふ英人がある。

『馬鹿にするない、乃公日本人だ。』と其日本人は癪に觸つたからさういつた。

『さうか日本人か、乃公又支那人かと思つた。どうだ英文は讀めるか。』

『讀めないでどうする、そんなものは造作無いんだ。』

『オヤコン畜生、生意氣なことをいふな。ちやア是を讀んで見ろ。』といひながら土地の古い英字新聞を出したから、其日本人はスラ〳〵と讀んで聞かせた。

『フーン知つてるから妙だ。』

『乃公のやうな日本人でも讀むから、貴公は本物の英國人だ、讀めないことはなからう、一つ讀んで聞かしてくれろ。』

『何有乃公英國人でもスコットランドだ。英文なんてそんな下らねえものは知らねえよ。』

然り彼等は母國の文字すら讀むことができないのである。

それから最一つ這麼話がある。或アイルランド生れの英人が、印度人を捉へて、

『黑奴！　黑奴！』とからかつた。

處が黑奴とは亞非利加黑奴のことで、南阿に澤山居る印度人のことは、色こそ黑けれ黑奴とはいはないことになつて居る。そこで其印度人大に怒つて、『黑奴とは何だ、失敬なことをいふな。』ときめ付けると、英人も醉つて居た勢で、

『何を小癪な。』といひさま打つてかゝつたので、印度人も負けては居ず、大道の眞中で大立廻りを始めた。スルト其處へ恰度巡廻の査公がやッて來て、

『コヤ〳〵貴樣等何をしちよるかアーン。』といひながら取靜めたので、件の印度人早速訴へに及ぶと、道理の解つた査公と見へて、惡口した英人を叱り付けて放免したので、其印度人も引退つたが、此邊に横行する無賴の英人に遭遇すと、外國人は實際手古摺らされる。

（十三） 吾輩は世界探檢家である

汽力なくして下る列車――所持金はあるか――得々としてナタルに入る――高火なる峰の塔――絶大なる苦痛――ダーバンに於ける同胞の銷魂兒――日本醫業婦撲滅の必要

六月十六日午前九時、ジョハネスブルグ發ナタルのダーバン港に向ふ。

ジョハネスブルグは高地でダーバンは海岸の低地である。汽車は此間の山と山との谷間を、殆んど蒸汽なしに下つて行くのだ。

ヴオルクラストとチヤアレストンの二驛は、トランスバールとナタルとオレンヂ河殖民地の三國に跨つ停車場で、列車は此二驛を過ぎて初めてナタルに入つて行く。

ニユウカッスル驛に着くと、ナタルの官憲から旅券係の官吏が列車内に出張して何か取調べ始めた。何しろ午前の二時といふのだから睡くて仕方がない。で、吾輩は初めそれを知らずに居ると、其役人に搖り起されて旅券の有無を詰

問された。

『吾輩は世界探檢家である。それだから永くナタルに滯留る人間でない。從つてナタル入國に就ての旅券は有つて居ない。』と吾輩悠然と構へて居ると、

『所持金はあるか。』と皮肉なことをいふ。

無錢探檢家に所持金のある筈がない。そこで吾輩眞正直に一文無であるといふた。

『それはいけない。廿磅以上有つて居ない者は、ナタルに入ることができないことになつて居る。』と面倒臭いことをいふ。

斯ういふ時にはいつでも旅行經過記明簿を出して見せるに限ると思つたから、やはら鞄の中からそれを取出し、殊更に例の南阿諸國の三個月旅行許可證を添へて、ギロ〳〵と眼ばかり光らせて居る役人に見せると、

『イヤ斯ういふ御身分なら宜しいです。拙者が然るべく取計つて置きませう。』

と言葉も態度も急に改めたので、吾輩は大威張りでナタルに入つた。

ジョハネスブルグを出發して、車窓から兩側の山だの野原だのを見ると、例の高さ一尺乃至六尺位の蟻塔が、彼處此處にポツリ〳〵と立つて居る。日本の蟻は一般に意氣地がないから、塔は疎か穴さへ碌なものは掘らぬが、大陸の蟻は却々大きな事業を行る。

此線路に使用される汽車は、南阿に於ける最下等のボロ汽車で、三等室の如きは實に慘澹たるものである。十七日午後二時ダーバンに着いたが、ジョハネスブルグから五百八十哩を走つて、汽車賃二磅十六志六片はチト高價過ぎる。斯の如きは無錢旅行家に取つて絶大なる苦痛である。

ダーバンでは岩崎といふ日本人が雜貨店を經營して居るといふことを聞いたので、停車場を出ると直ぐ其足で彼を訪問した。

彼は喜んで吾輩を迎へ入れた。まだ見たところ漸く二十七八にしかならない

やうであるが、それでも雜貨店の外に洗濯屋まで行つて居た。色々話してる處へ小川といふ人が歸つて來た。此人も岩崎と共同して事業を經營して居るといふことであつた。

岩崎と小川も日本から直接にダーバンに來たのではない。初め彼等は濠洲に渡航したのだが、其處では餘り面白いことがなさゝうなので、彼等は他の同志二人と共に、苦しい中から辛と旅費だけを調達して南阿に向けて出發した。最初四人の目的はダーバン邊りで仕事をする積りではなかつたらう。いづれキンバレーかジョハネスブルグへでも押出して、一釜起す決心であつたらうが、汽船がダーバンに着て、其處へ上陸したときは、囊中既に餘錢なく、食ふものとて僅かに罐詰が一箱あつたに過ぎなかつた。

岩崎初め他の三人は一旦上陸はしたものゝさてよい分別も出ない。加之右を見ても左を見ても知らない人ばかり、躊躇してると餓死でもしかねまじき狀

に陷つたので、四人は腦にあるたけの智惠を搾り出して相談した。其結果洗濯業を始めやうといふことになつて、種々苦心の揚句兎に角一軒の洗濯屋を開いた。當時恰度英杜戰爭後で人氣は高潮に達して居たし、さういふ店が他に餘りなかつたものだから、開業早々非常な評判で、殊に手洗濯が土地の人の氣に入つたと見えて、忽ちの内に大繁昌を來し、四人で手が廻はりかねるやうになつたので、在留の印度人を傭ふて注文に應ずることにした。其數凡そ三十人、來客の應對と洗濯の仕上げとは、必ず四人が引受けるやうにして、町嘱と誠實を專一にして只管顧客の便宜を計らんことに力めた。

雜貨店は岩崎が經營の主任に當り、洗濯業は小川が引受けて居た。四人の中二人は止むを得ざる事情のために、岩崎小川を殘して歸朝したのだ。

吾輩世界到る處に日本人が居るのを見て、一種心强い感じが起つた。無論開くだにいまはしい醜業婦も、殆んど世界の隅々まで行き渡つて居るやうである

が、今後內地の取締りを嚴重にし、又一方に於て道德的進步を計つたならば、恐らく現在世界の各所に散在せるものが、醜業婦發展史の最後の頁を充たすに止まるやうになるであらう。吾輩は國家の威嚴から將又道德上の必要から、一日も早く所謂醜業婦なるものゝ撲滅せんことを希望して止まぬ。さうしたならば、日本人の發展は今より遙かに眞面目なものになるであらう。

日本人は決して成功しない國民ではない。若し其體驗を擧げよといふならば、吾輩は其實例を幾つでも有つて居る。日本は年々五十萬の人間が殖えて行く、此仕末は何うしたものであらうか。滿韓發展は必ずしも國家百年の大計ではない。イヤ現在既に其政策は誤まつたものであると世の識者は認めて居る。吾輩も是には至極同感である。今にして政府當局が覺醒し、國民が國家的自覺心を起さなければ、日本は遂に行倒れになつてしまふことは明らかである。小學から大學まで二十年近くも親の脛を嚙つて、漸くのことに三十や四十の金に

有付くのが男子の面目ではあるまい。大學卒業の乞食がウニヨ〳〵するやうになつては、學問のためには幸福かも知れないが、國家社界の不幸是に越したことはない。國民を如何に敎育すべきかといふことは無論大切なことである。併し其人間を如何に仕末すべきかといふことは、ヨリ以上にヨリ切實に研究の必要があるではないか。現今の大臣相公等が其屍を墓穴に埋める頃までには、或は日本は人口增殖が原因で亡びるやうなことはあるまい。併し有爲の政治家は自分等の忌の根が絕えない間に起らない事柄ならば、さうセカ〳〵焦慮るに及ばないといつたやうな無責任であつてはならぬ筈である。吾輩は好んで今の爲政者が謗るのではないが、總てのことを最少し眞面目に取扱つて貰ひたいと思ふ。それでないと今に二進も三進も行かなくなる。

(十四) 珍妙なる土人の牛頭車夫

厄介なる白人――彼等は悉く無細淡なり――人力車は日本風だ――車夫の前額に燒火箸で印をつける――頭に角を着け毛を被る――是れ即ち牛を氣取るものなり――五十圓の貯金が土人の理想――牛一頭と嫁一人――土人には前途あり

ダーバンはナタルの首府で、英杜戰爭後急に膨脹した亞弗利加東海岸の一商港である。從つて當時はまだ一攫千金を夢みるに餘念のない連中ばかりで、總ての闊子が風船玉のやうにフワ〳〵して居た。

在留白人の大部分は支那人に是をかけたやうな蘇格蘭人ばかりで、金のある奴もない奴も、揃ひも揃ふて無教育無節操な無賴淡ばかりであつた。英國官憲も是等の輩には手古摺つて居たらしかつた。彼奴等は日本を支那の腦髓だと信じて居る。それだから自然吾輩などに對しても平氣で無禮なことをいつたりしたりする。猶に觸はつて叶はぬ。又道廢奴原はダーバンが最も多い。餘程仕末の惡い處だ。

それでも市街の體裁はかなりに整つて居た。公園などもあるから感心だと思つた。公會堂の二階の一室が博物館になつて居た。南阿產の鳥獸、土人の武器獵器、樂器、其他種々人類學上の標本などが陳列してあつた。

ダーバンで最も面白く、最も珍妙に感じたのは、土人が人力車を曳く有樣を見たときであつた。聞けば英政府が土人に生業を與へる主旨で、日本風の人力車を輸入して、それを一日幾らかの貸賃を取つて貸すのださうな。是だけならば別に不思議はないが、車夫たる土人の風俗が痛快である。先づ前額部に燒火箸で燒き付けた方形の痕跡があるのでいゝ加減に驚かされるところへ、頭へ牛の角を二本ニョッキとばかり結び付け、角の根元へ長い毛を冠せて、宛然牛を氣取つて居るのを見ては、アッとばかりに呆れざるを得ない。是は人力車は人間が曳くべきものでない、牛が曳く方が當然だといふ英人の見地から、揶揄半分にそんな屈辱的の風俗をさせたので、一見其珍妙に驚かざるを得なかつたの

である。日本の車夫に牛の面を被れといふ警視廳令が出たら、定めて人權蹂躙だとか何とかいつて騒ぎ立てるだらうが、土人は英人の壓迫と屈辱を受けながら、御無理御尤で一生懸命に稼いで居る。それからまだ妙なことがある。牛の角で驚かされていふことを忘れたが、車夫は膝までは半股引を穿いて居て、膝關節以下の裸部は白ペンキで塗り立てゝ居るのが甚だ變に見える。吾輩は初め白の靴下を穿いてるのかと思つた。牛頭の車夫にしては贅澤だと思ひながら近寄つて見ると、豈に計らんや白ペンキ塗であつたので、北天來の奇想に思はずアッと驚嘆した。

土人の無頓着なること凡そ斯の如しで、彼等が白人に傭はれて行く日常は、小麥粉一升、砂糖十錢、食鹽五錢である。彼等は一升の小麥粉を三度に分けて食ふ。鹽と砂糖を粉にまぜ水で溶いて食ふが、不思議なことにはそれで充分肥滿して行く。一週間に一度牛肉が供給される。土人は午後九時以後市中の通行

を嚴禁される。是を犯す者は二十磅の罰金だから、夜は土人は決して外出せぬ。何の必要あつてか知らないが、隨分慘酷な壓迫である。

土人の結婚は極めて手輕である。先づ五磅の貯金ができるとそれで牛を一頭購ふて、己れの愛する女の親に送る。日本でいへば結納である。先方の親が喜んで受ければ娘は此方のもので、結婚が初めて成立する。又暫く過つて五磅貯まると、他の新しい嫁を迎へる。從つて辛抱人程多く妻を持つといふことになる。だから地方から土人が競ふてダーバンへ出稼ぎに押出す。で、五磅貯まると故郷へ歸つて結婚する。至極簡便なものである。彼等は生活が簡易だから、女房の五人や六人有つて居たつて生活難に襲れるやうなことはない。それは羨ましい程平氣なものである。世智辛い世の中でヤレ失戀だの厭世だのと煩悶する奴原は、斯ういふ處へ來て土人の樂天生活を見るがよい、無益い妄念は立所に散つてしまふ。

土人の取締は土人から採用した巡査の責任である。此巡査は土人以外の民衆に對しては絶對的に何等の權力も有つて居らぬ。

土人は市街で商業を營むことを禁じられて居る。庇を貸して本屋を取られた土人は、這麼馬鹿な目に遇つて居る。人生弱者となる勿れである。斯の如く強者の屈服する世の中にあつて、呑氣な夢のやうな平和論を唱へて居る大馬鹿者が居るから面白い。彼等は其爲めにキリストを擔ぎ出し、共產主義を引張り出し、軍備全廢論を絶叫して居る。何たる迂遠ぞ。彼等は人類創造の昔に、造物主が人類間に强弱の差違を造つた疎漏を何故責めぬ。既に强弱の差があれば、强者は弱者に打勝つにきまつて居る。併し何時までも弱者は弱者ではない。强者から受くる壓迫の反動は必ずある。それが弱者の向上である、發展である。是なくんば弱者に生存の意義はない。歷史は此事實の證かなることを證明して居る。現在に英人のために苦しめられつゝある土人も、或は其位置を轉

倒して英人を支配するやうになるかも知れぬ。イヤさうなくてはならぬ。要するに運命は廻はり持である。複雜である。平和論者のいふやうな一本調子なものではない。それは或は黃金時代といふものが來るかも知れぬ。併し其時代は恐らく人類をして自殺せしむる及であらう。アーメンも落麵もあつたものでない。人間は大に食ひ、大に働き、俯仰天地に耻ぢないことをすれば、其人は立派に徹底した人であるといつてよい。宗教とか蜂の頭とかいふものは、自分で自分を濟度し能はぬ精神的弱者にのみ必要である。吾々は此意味に於て宗教の存在を認め、且つ之を適度に尊重して行きたいと思ふのだ。

話しが脇道へ外れたが、詮じ詰めれば要するにそんな者だ。

亞非利加の土人は歐洲列國のために、現在如何程迫害を受けて居るか解らぬ。併しそれは一時的の現象だ。世の終りまで是が續いて行くとはどうしても思はれぬ。後で開けた國にはそれだけ永い前途がある。等しく天の惠みに依つて此

世に生れた亞非利加の土人も、此永遠悠久なる前途を列强の壓迫の下に、唯無意味に過ごしてしまふやうなことはないに相違ない。盛衰は必然の理である。歐羅巴と亞非利加と位置を換ゆれば、世界的平和も世界的平等もあつたものでない。況んや怠惰者の考へた共產主義をやで、國際間は勿論のこと、個人間の勢力にも强弱消長は決して免れ得べきでないのである。要するに平和論者などゝいふ連中は、自分の頭の上の蠅も追へない癖に、他人の世話ばかり燒きたがるが節介者流であらねばならぬ。

（十五）亞弗利加東海岸北航の首途

僅かに小遣錢が殘つたばかり――無錢旅行者の危機――二百圓持つて居なければ上陸は許せぬ――あらゆる惡德の行はるゝ町――ブチンドゥと四道になつた――ゴム輪の二人乘

ダーバンでは思はず永滯留をした。それはポートサイド行きの獨逸郵船を待

つたからである。ダーバンから地中海の人口まで歸るには、此獨逸船に依るの外途がない。餘り郵船が無さ過ぎるやうだが、東部亞非利加は多くの汽船の運轉を爭ふ程發達して居ない。

六月三十日、午前十一時、クラウンプリンス、オブ、ダッチ號に乘込んだ。本船は二本煙突の大きな汽船だ。

無錢探檢家も已れの欲する場合に於て、常に無賃乘船乃至乘車ができると、恐らく天下此位呑氣なものはなからう。さりながら實際は却々さう旨く行くものでない。殊に長途の航海に於て、佛規の貨金を支拂はなければならぬ無錢探檢家程悲慘なものはない。餘程ポケットの都合が良好な時でも、乘船貨金を支拂つた後は僅かに小遣錢が、底の方にチョンボリと殘るだけで、若し失れ險惡なる低氣壓にして懷中を襲はんか、颱風忽ちにして懷中の虎の子を吹き飛ばし、又遂に如何ともすること能はず、酒は下戸で飲まぬにしたところが、好きな煙

草も熱い珈琲も、殆んど半永久的に咽喉へは通らぬ。が、それ等は寧ろ尊常茶飯事で意に介するに足りないが、汽船に乗りたくも、汽車に乗りたくも、パンが食いたくも、茶が飲みたくも、悵中絶對に無一文なるときは、有繋に心中輒た寂寞を感せざるを得ない。で、此刹那が無錢檢檢家の最も臓心を要するときで、或者は之に依つて初志を挫き、又或者は是に依つて墮落する。

それを思ふと、吾輩の如きは寧ろ幸福だといつてよい。勿論缺乏と困窮には堪えず脅かされた。併し旨くそれを切抜けて、兎に角健全に大陸の東海岸を北上することができるといふのは、吾輩の身に吾輩の志を弟みし玉へる神明の加護が垂れられてあるといはねばならぬ。

南印度洋の波は靜かであつた。測り知れぬ千尋の底に時ならぬ憤怒が潜んで居るかと思ふと、坦々たる平安の大道を往くが如くであつたけれども、何處とはなしに狎れ難き大なる威嚴があるやうに思はれた。要するに海洋は古英雄の

如きものである。大海神の御心平らかなるときは、白鷗さへ波の上に樂しい睡眠を貪ぼることができる。さるを一度御心聊かにても狂はんときは、山の如き鐵艦も忽ちにして嚙み下される。

海洋は斯くして海に住む者に偉大といふことを敎えて居る。海洋の感化といふのは此點である。往昔から潮風に吹かれた船乘が、一面に於て豪放磊落の氣質を備へて居ると同時に、他の一面に於て涙脆い穩かな感情を有つて居るといふのも、道般の消息を語る絶好なる證明ではあるまいか。

翌日午後三時葡萄牙領のデラゴア港に投錨した。此處は一名ローレンゾウ、マークキスともいふ。燈臺のあるイハカ岬を迂回して入港するのだ。遠淺で上陸には一方ならぬ不便がある。

上陸は二百圓所持して居なければ許されない。白人なども中には拒絶された者があつたが、吾輩は例の特別詮議で上陸することができた。

此處からトランスバールの首府プレトリヤへ汽車の便がある。南亞戰爭中、杜國の使節に同情する者共が、極めて秘密に此處から武器彈藥をプレトリヤに送つた。後に英國がそれを聞知つて嚴重な抗議を申込んだといふことだ。

市街は頗る立派でない。殖民地の海港だけあつて、市街の空氣が濁りきつて居る。明るい華やかな店舗より、何となく暗い心地のする居酒屋が多い。番頭は多く支那人で、中には希臘人伊太利人などもあるが、大抵何の家にも怪し氣なる婦人を雇ふて居る。

雜貨商は殆んど悉總てが印度人だ。

プレトリヤへ行きたいと思つたが、時と金とに餘裕がなかつたので止めた。往年南亞の英傑クリユーゲルが、北精鋭を提げて叱咤號令した處を、此儘訪れで北に去ることが、逆旅の身の吾輩に取つて何ばう悔しき限りであつたか、吾輩は今に至るまで是を終生の遺憾として居る。

港、水夫、居酒屋、賣春婦、總て是等を聯想するときは、賭博といふことを思ひ出さずには居られない。然り、此港は殆んど賭博の公開地である。

吾輩が見物を終へて船に歸らうとすると、一人の支那人がニコ〳〵笑ひながらやつて來た。變な男だと思ひながらも、此方はそんなことには頓着なしサツサ〳〵と行き過ぎやうとすると、支那語で何か話し掛けた。生憎吾輩にはそれが解らない。で、知らぬ顏をして居ると、今度は拙い亂雜な英語で、何うですか賭博をせんかといふ。是には驚いてしまつた。が、素知らぬ顏をして通り抜けやうとすると、上衣の裾を引捉へて放さない。世の中には隨分無遠慮極まる奴があると思つた。大道の眞中で賭博を打たうといつて引止めるといふことは、日本人の頭腦では想像のできないことであるが、賭博公開場ではあるし、相手が支那人ときては、そんなことを屁とも思ふのぢやない。

『恰度今非常に好い賭場が立つて居る處です。行きませんか、私が案内します。』

這麼ことをいつて居る。

『乃公は賭博は嫌いだ。放せッ！』といひながら振放さうとしたが、彼奴慥乎持つて居るから放れない。

『僅かな資本で莫大な利益を得ることができる。世の中、賭博位面白いものはない。そんな馬鹿々々しいことといはずと、私と一所に來るがいゝです。紳士。』

『蒼蠅ッ！』

『ホウ可怖いお顏ぢや。併し怒ることはありません。私が貴下の利益を思ふて勸めるのであります。』

『馬鹿ッ！』と吾輩は大喝した。

今度は吃驚するだらうと思つた。それでも平氣の平左衛門である。で、仕方なく最後の解決を武力に訴へた。といつて短銃の火蓋をきつた譯ではない。吾輩の節奥立つた鐵拳をギユッと握り固め、それに氣合をかけてグワンとばかり

右の横顏を殴り付けてやつた。

『ワッ！』といつて手を放した。で、吾輩其儘歩き出すと、件の支那人矢庭に後から抱き付いた。執念深い奴だとは思つたが、此位のことはあるべき筈だと覺悟はして居るから、敢て此方は些とも驚かない。體を一搖り搖つて振放す途端に、相手がヨロ〳〵とする處を、足を上げてドーンと横腹を蹴ると、頭轉倒と四這に倒れた。

吾輩は悠々として立去つた。支那人のボン引などに骨のある奴はない。終に其儘泣き寢入つたが、別に後から追ふても來る樣子もなかつた。

此處には護謨輪二人乘の人力車が流行して居た。是等は皆北米から輸入するのださうな。人力車の本家たる日本では漸く此頃になつて護謨輪になつたが、今から六七年も前に東部亞非利加の一小港に於て、既に早く行はれて居たといふのは一寸妙である。それで面白いのは、車體の後に一本の支持棒が垂下して

居ることである。是は車夫が間の抜けた土人だから、今迄に客を乘せて後へ轉覆させた苦い經驗が、何度も何度もあつたので思ひ付いた考案で、つまり是で以て萬一の際に後方の轉覆を防がうといふのだ。

船へ歸ると大騷ぎの眞際中であつた。それは軌條をデリックで胴船に却すとき、一本の軌條が水平を失つて、垂直に胴船の底に落下し來り、大きな穴を打開け、其處から潮水が浸入して、胴船は百本ばかりの軌條を積んだ儘沈沒してしまつたのだ。幸に負傷人はなかつたが、一時は却々の騷ぎであつた。

（十六）英國紳士の獅子狩壯談

珍しい人車鐵道＝却々の亞非和加通だ＝危險な代りに愉快＝エッサ湖畔大狩獵＝獅子だ！＝血潮は滾のやう＝愛犬の復讐＝灰色の獅子の巨頭

翌日午後三時出帆、四百五十五浬を北航してベーラに入港、此間は別に記すに足る出來事もなかつた。

ベーラは港としては頗るお粗末千萬なもので、唯ホンの汽船が息次をする場所に止まつて居る。陸上にトロック的の輕便鐵道がある。輕便鐵道といつても汽車ではない、土人が後押しを行るのだから一種の人車鐵道である。軌道は官憲の所有で、一定の使用料を徴收して、車體を運轉せしむるやうになつて居る。自用車になると年額五磅を納めなければならぬ。

市街には相變らず不健全の空氣が漂ふて居る。居酒屋、賭博宿、淫賣宿が到る處に充滿して、一見其亂暴なのに驚かずには居られない。在留邦人は男四人女三人に過ぎない。男は正業者であるけれども、女三人は例に依つて例の通りの醜業婦である。

午後三時四十分出帆、三百八十浬を航してモザンビックに入る。遠淺だから汽船はズット沖に錨を卸した。

土人が陸上から種々な猛獣の毛皮を賣りにやつて來る。虎もあれば獅子もある。而もそれが非常に安價い。素敵に美いのがある。金のある奴は大抵一枚位は買はずには居られない。吾輩も固より欲しくないことはなかつたが、無錢坊に虎の皮でもあるまいと思つて斷念した。

七月九日午後四時出帆、英領ザンジバルに向ふ。

此處から一人面白い男が乘つて來た。此男は英國の貴族の息子で、三四年前から亞非利加を彼方此方と旅行して歩いて居たのである。快活なまだ辛と二十七か八かの青年であつて、三等室に吾輩が居るといふことを誰に聞いたか、態々先方から訪ねて來た。三四年も暗黑大陸の空氣を吸ふたゞけあつて、却亞非利加通であつた。吾輩はザンジバルへ着いたら、一つ猛獣狩を行る機會を捉へたいと思つて居た矢先であつたので、スタクトン——其青年の名——を促して壯快なる猛獣狩談を行らせた。其語るところに依るとキリメンからザンベ

ジ河を遡り、山を超えてニエッサ湖畔に到る間を狩り立てたやうに思はれる。吾輩は今彼自身をして當時の狩獵談を物語らしめることの、必ずしも無益の業でないことを信ずるのである。是から下に語るところは彼自身の實話で、僕といふのはいふまでもなく彼自身のことである。

僕の猛獣狩は危險であつた代りに非常に壯快なものであつた。從つて語るべき出來事も隨分澤山ある。或時ニエッサ湖畔で獅子に襲はれたときの如きは、有繋の僕もヒンヤリとせざるを得なかつた。其日は朝から晩まで何等の獲物もなかつたので、落日の光りを淋し氣に浴びた大森林を背にして、靜かに暮れ行くニエッサ湖畔に、用意の天幕を張つて露營の準備に取掛つた。

從僕の土人が立てゝくれた熱い珈琲を飲んで、身を天幕の中に横へたときは、體が綿のやうに疲れて引き入れられるやうな睡氣がさして來た。で、例の通り土人等に能く氣を付けるやうに命じて置て、最う醉ひ潰れたやうに熟睡してし

まつた。僕の傍には愛犬のジョンが、僕へ體をすり付けるやうにして、是も幽かに鼾の聲を立てつゝ、四足も頭も一所に丸くなつて寢て居た。僕は常に夜間天幕の外へ土人を二時間交代に一人宛見張をさせて置く。で、其晩も外へ見張を出して置た處が、恰度夜半頃番に當つた奴が大事な役目を忘れて、草叢の中にグッスリ睡り込んでしまつた。此奴がそんな横着をした理由が後になつて解つた。それは彼が從僕の土人をそゝのかして、僕の行李の中に藏つてあつたウヰスキーを少々失敬したのが利き過ぎて、何とも彼とも堪えられない睡氣を催して來たので、殆んど無我無中で天幕の外へ倒れてしまつたのだ。道理ことがあつてはならぬと思つたし、又平常餘り酒を飲みつけない土人に酒を飲ませると、土人間は勿論主人たる僕に對して、或はどんな間違を仕出來さないとも限らないから、前以て嚴重に酒類は與へぬことにして來たのだが、從僕の年若なのに乘じて、遂に二頭の酒慾を充たしたものであるらしい。兎に角其晩僕はそ

んなことには一切無中で寢て居ると、けたゝましい叫聲にハッとばかりに眼が醒めた。

僕は飛起きさま押取銃で天幕の外へ駈け出さうとした。ジョンの奴が火の付くやうに吠えながら、僕の後から續いて飛出した。途端、低くはあつたが底力のある恐ろしい咆哮の聲が、僕の耳へ錐を突き立てるやうに響いた。

『獅子だ！』と僕は心の中で叫んだ。そして右手に銃、左手に入口の垂れをはねのけて一歩天幕の外へ踏み出し、折柄の月光に前方を透かし見ると、巨大の牡獅子が今や將に見張の土人に飛び掛らんとして居る。土人は横頰からタラタラと血潮を流のやうに流しながら、銃身を逆さまに渾身の力を籠めて獅子を打たんと身構へて居る。僕は此時其土人が何故に發砲しないかと疑つた。が、後に至つて能く聞いて見ると、先生酔拂つて裝彈することを忘れたばかりか、彈藥帶まで御丁寧に天幕に置して置たので、不意に寢顔を爪で引掻かれてキャッ

叫んで飛出きさま、筒口を向けて分金を引いたが、元來彈丸がないのに鳴りもせず、といつて逃げる暇にも行かないので、詮方盡きて銃身で以て僅かに抵抗して居た處であつたのだ。

僕は突嗟の間に一發狙撃した。が、不幸にして外れてしまつた。と思ふと獅子は今迄の土人を捨てゝ、半ば體を天幕の外に出しかけて在る僕に向つてやつて來た。此時まで是程の騒ぎが忍つたとも知らず、いぎたなく睡眠を貪つて居た土人等も、初めてハッと眼を醒まし、天幕の外へ出やうとして入口まで顔を出すと、獅子が今や僕を一口に咬み殺さうとして飛び付きかけて居る處であつたので、度膽を抜かれて思はず夕ジ〳〵となつた。

獅子はヒラリと前脚を揃へて突進し來つた。僕は次の彈丸を打出した。スルト今度は何處かへ命中したと見え、例の百獸が怖れ戦くといふ咆哮の聲を振り立てゝ、何と思つたか一生懸命で其儘森の彼方を指して逃げ出した。僕は月明

に其逃げる方を凝視めた。

此時までジョンは幾度か獅子に飛び付かんとしたけれども、其都度僕が足で天幕の中へ押し遣るやうにして居たので、唯猛烈にワン〳〵吠えるばかりであつたが、僕の放した一發をくらッて獅子が逃げ出すと、僕の油斷を見澄まして、ヒラリとばかりに天幕を飛び出し、獅子の逃ぐるのを何處までも〳〵といふやうに追ふて行つた。僕は如何にかして手許へ呼び戻さうとしたが、彼は遂に歸つて來なかつた。さうかといつて僕自身が其後をつけて行くといふのは危險で且つは無謀であると悟つたので、殘念ながら翌拂曉を待つことゝして、其夜はそれから一睡もせずに警戒を嚴にした。

翌日土人等を勵まして附近を捜索したが、犬の行衛は知れさうにもなかつた。で、獅子の逃げて行つた方向へ、段々進んで行くと天幕から二哩ばかりの草叢の中に、半ば喰ひ殘したジョンの死骸が遺棄してあつた。

僕は此時位腹立たしく思つたことはない。獅子の獰悪を憎んで怒り心頭より發した。勿論愛犬の死を悲まずには居られなかつたが、先づそれより此仇打がしたいと思つた。が、有繋に次の瞬間に其目的が達せられやうとは豫期しなかつた。何故なればジョンを咬み殺した獅子が、直ぐ近所の藪の中に潜んで居やうとは思ひ掛けもなかつたからである。

僕は何の氣なしにジョンの死骸から眼を放して、固く唇を噛んだ儘四邊を見廻はした。スルト意外にも灰色の獅子の巨頭が、向ふの藪から真正面に僕等を睨んで居るではないか。一時僕は悸然とした。併し直ぐ思ひ返した。それは昨夜自分の打つた弾丸で、敵は案外重傷を受けて居るのではあるまいかと考へ付いたからだ。其證據には何となく元氣がないやうであつた。一體猛獣といふものは或時は非常に臆病なもので、昨夜のやうに發作的に人間を襲ふことがあるけれども、多くは人間を怖れて自ら避ざかるのを原則として居る。そこで

此意味からいつたならば、彼は僕等の近づき來つたのを見て、第一に逃げ出さなければならない筈である。然るに彼は靜乎として些しもそんな樣子がない。さうかといつて飛込んで來る勇氣もないらしいので、僕は氣を丹田に落ち付けて、先づ彼の前額から腦を射貫くべく狙ひを定めた。

弾丸は見事に思ふ處に命中した。森林の獣王は一しきり最後の悶えを見せ、癇て脆くも三寸忽絶えてしまつた。後で其死骸を調べて見たら、昨夜の弾丸は前脚の間から胸部を貫いて、些少ながら心臓を傷けて居たことが解つた。それで彼はそれ以上遠くへ去ることができなかつたのだ。僕は生前仇敵であつた犬と獅子の屍を並べて、無限の感慨に打たれつゝ、濃緑の森を靜々と登り行く朝日の影を凝視た。

以上は吾輩のスタクトンから聞いた長い猛獣狩の談話の一節である。まだ此外に面白いことが澤山あつたけれども、是だけを讀者に紹介するに止めて置

かう。

（十七）英人に侮辱された印度人

英領ザンヂバル――毛皮をごまかす水夫――厄介な印度人――不條理な英人の壓道――獨逸船ではさう行きません――印度人の泣寢入――サンヂバル在留人の惡風

船中に愉快なる話相手を得た吾輩は、七月十二日といふにザンヂバルに入港した。

ザンヂバルは香港のやうに一個の島である。今から百年ばかり前に强制的に英領にされてしまつた。島にはサルタン、モハメダンといふ王が居る。英國政府は彼の領土を奪つたけれども、今でも相應の敬意を拂つて居る。現に彼のために海岸に宏壯なる洋風の住宅を建築して與へた位だ。

市街は印度風で頗る汚く且つ狹い。二人並んで通つて窮屈を感じる。

通貨はルピーで、宗教は回々教だ。

日本人が十二人ばかり居た。内二人は男、十人は女であつた。いふまでもなく女は醜業婦だ。尤も中に二人ばかり白人の妾となつて、居酒屋の女將になつて居た奴があると聞いたが、何れにしたところが五十歩百歩で、日本帝國の面目からいつたら困つたものである。男二人は眞面目な時計修繕を業として居た。

此處でも汽船が入港すると、土人が猛獸の毛皮を賣りに來る。虎の毛皮でも五六志から十志出すとかなりのが買へる。寶珠玉の斑紋ある狐の毛皮などがあるが、吾々日本人には一寸珍である。是等毛皮商人が汽船の甲板に上つて最も手古摺るのは、下等船員即ち水夫火夫の連中である。彼等は土人の毛皮を旨くごまかしてしまふ。商人が何といつても一旦手にしたら決して返して遣らぬ。其亂暴壓制驚くに堪たりである。

モザンビックから密航した白人が五人ばかりあつたが、途中で發見され、例の甲板裁判といふ奴で、一定の勞働を課せられた。此宣告を聞いて五人は澁面作つて苦りきつたが、どうも詮方なく、或者は火夫に、或者は水夫になつて働いた。それがザンジルバルに入港してから、何ういふ風に相談が纏つたか、普通の三等船客として取扱はれるやうになつた。何處へ行つても錢のない奴は幅が利かぬ。無論錢のある奴でも幅の利かないのがあるが、人間は錢が無くても幅が利けるやうにならねば駄目である。鍍金の金佛のやうにピカ〳〵光つたつてそれは一向役に立たぬ。

役に立たぬといへば、印度人は一般に厄介である。併し彼等とても餘り馬鹿にすると腹を立てる。それが爲めに一騒動持上つたといふのは、ダーバンから乘つた英國陸軍の下士官が、自分が三等船客でありながら、同じ三等船客たる印度人をどうも輕蔑して仕方がない。或時印度人の或者が定められる三等船客

の散歩場でブラ〳〵して居ると、其處へ例の下士官がやつて來て、貴樣生意氣だとか何とかいつて怒鳴り付けた。が、印度人はそんな不條理な壓迫には耳傾けない。殊に汽船は英船でなくて獨逸船だから、印度人に取つては多少心強い處もあるので、下士官が何といつても知らぬ顏をして濟まし込んで居る。處が是が非常に下士官の感情を害したと見え、猛然靴を上げてしたゝか相手の印度人を蹴つた。蹴られた奴は眞黑な顏に紅を注いで憤怒の形相恐しく、グッとばかりに下士官を睨み返したが、悲しいことには亡國の民で、鐵拳を揮り固める意氣地がない。殊に下士官以外の英人がワイ〳〵騒ぎながら加勢するので、何とも彼とも手の出しやうがない。

其處へ船の士官がやつて來て、下士官を制して亂暴の理由を詰つた。

「何故貴下はさう此人を苦しめるのです。」

「別に好んで暴行を加へる譯ではないが、吾々は彼等印度人が此處に來る資格

がないと思つて居るのに、何度いひ聞かせても圖々しくやつて來るので、今俄が凝らしめの爲めに蹴倒した處なのだ。」と下士官は肩を聳かしていつた。

「それは不可せんね。英國汽船では兎も角、吾獨逸船では船客としての英國人と印度人とを區別することはできないのです。」

「だが彼奴等は汚いではないか。」

「仕方がありませんな。」と運轉士は濟ましたものである。

「仕方がないことはない。兎に角彼奴等の散歩區域を制限して、吾々の方へやつて來ないやうにして貰はないと困る。」

「そんな馬鹿なことができるものですか。吾獨逸船では三等船客は三等船客で一視同仁ですから、どうも貴下のお求めには應じかねます。」

何といつても船員の方で取上げないので、其儘下士官の方でも沈默つてしまつた。併し是がために印度人は益々感情を害し、ザンジバルへ入港したら、あ

欠

MISSING

として是を群がり見るが如きは。彼等にあつては寧ろ尋常茶飯事である。然かざらんと欲するも豈に得べけんやではないか。

奇怪なる事實を叙して、吾輩の筆の甚だしく汚れたことを悲む。と同時に讀者の耳目に禍したことを謝せなければならぬ。されど吾輩の意は固より醜惡を摘發して、一般の好奇心を刺激せんと企てたのではない。吾輩は寧ろ是に依つて或新しい意味を、讀者諸君に提供したつもりで居るのである。

議論は此邊で止めて土地の名產を紹介しやう。猛獸類の毛皮の事は前に述べたから、改めて此處にはいはぬが、此外に土地から非常に良質な琥珀が出ることだけは記憶して居て貰はなければならぬ。從つて價格も却々高い。丁字油、バナヽ、蜜柑、椰子等も盛に產出する。是等の產額だけでも年々大した金になるといふことだ。

（十八）物凄き大森林の一夜

何だ馬鹿々々しい――田川寫眞店――猛獣毛皮が安い――亞弗利加には日本人の勢力なし――大陸内地の停車場――ソラ獅子の來襲だ――河馬？　そいつは面白い

ザンジバルから獨領のデルサレムに渡つて、其處の見物を濟ませ再び取つて返した翌日、即ち七月十七日朝出帆してタンガに向つた。

船の都合とポケットの都合で、ザンジバル碇泊中、對岸の大陸に渡つて大活動を行らうと思つて居たが、或事情のために遺憾ながらそれを中止しなければならぬやうになつた。

港の外は波が靜かであつた。ダーバンを出てから未だ荒天に一度も遇はない。餘程厚い天祐があつたと見える。午後七時頃船は急に進行を中止した。何が何だか譯が解らないので、船客一同は大に心配して、いひ合はしたやうに胸を騷

がせて居た。處が間もなくそれがタンガ入港の潮時を待つためだと解つたので、何だ馬鹿々々しい、飛んだ人騷がせな！

嘶て再び進行を始め、午後九時といふにタンガに錨を投れた。此間七十五浬。港口から錨地までは細長い水道になつて居る。港としては惡い方ではないが、何等人工的設備に見るべきものはない。白人四千土人五千、此中に田川といふ日本人が一人寫眞屋を營んでるのがあつた。吾輩のやうに東西にさすらふ身でも、時として寂寞と孤獨の感に堪えないことがあるが、況して年來唯一人黑白兩人種の間に立ち混つて、他日の成功を氣長に待つてる彼も、月消き宿、定めし非多感の胸に幾多切々の情を宿すであらう。

此處からヴキクトリヤ、ヌヤンザ湖まで百五十哩の鐵路がある。當時盛に內地の開發に力めて居た。土地は一エーカー十五志で買へる。是に綿や米を植ゑるとかなりの收穫があるといふことだ。土人を使役すれば一日二アナー（邦

貨約八錢）で足りるといふから、奮闘的快男子は一つ大に踏み出しては如何。

此處でも猛獣の毛皮が安價い。

翌日正午タンガ出帆、英領モンバサに向つた。此間七十哩、午後九時入港。

モンバサは殆んど赤道直下の土地で、焼け付くやうに暑い。

此處からもヴヰクトリヤ、メヤンザ湖に鐵道の便がある。日本人が八人ばかり居た。内五人は女で醜業婦だ。三人の男は寫眞屋や料理人などで、別に吹聴する程の仕事を遣つてるのは居ない。概して亞非利加に於ては日本人の勢力が少い。イヤ殆んど零に近い。日本人は悉く支那人と一所にされる。吾輩の如きも到る處で支那人と間違へられた。それは眞正の支那人が斷髪して洋服を着てるからだ。併し支那人と日本人とは決して似ては居ない。人種は或は同じであるかも知れないが、一見して此兩者の間の區別を知ることができる。それを知らないで、日本人と支那人と見誤まるのは、それは自己の恐なることを表明す

るものである。道理で亞非利加では左程利巧な人間に遭遇せなかつた。が、日本人の勢力の無いことは確實だ。是だけは何といはれても仕方がない。久水領事が南亞視察の途次、新聞から惡口をいはれたのも、日本人の勢力が認められて居ないからのことだ。道理ことでは一向つまらない。日本人の發展地として滿韓の如きはケチのケチなるものである。吾等は吾等の同胞をして、茫漠たる南米の天地を埋めしめ、且つ更に亞非利加大陸をも、旭日帝國の勢力下に置きたいと思ふ。

モンバサは入港の翌日直ぐ出帆する筈であつたが、機關と舵機に故障が起つたので、三日ばかり碇泊期日を延ばすことになつた。吾輩は是を聞いたときポケットの都合さへよければ、此處からヴヰクトリヤ、メヤンザ湖畔まで押出し、猛獣狩でもやるにとツク〳〵思つたが、殘念ながら何う考へてもそれができない。ミス〳〵此絶好なる機會をあだに過すかと、聊か憤ぎ込んで居ると、例の

スタクトン君がやつて來て、

『僕は是から上陸して猛獸狩に行かうと思ふが、君一所に行かうではないか。』

といふ。

『行かう。吾輩も實はさう思つて居た處なんだ。』と吾輩は立所に答へた。

實際渡りに船とは此事である。萬事斯の如く旨く行くと不平などの起るべき道理はないのだ。

スタクトン君のポケットは常に重い。かるが故に吾輩にかゝる一切の費用は無論彼から喜んで負擔するといひ出した。金のある奴が金のない奴を立涙な目的のために補助するに別に不思議はない、又吾輩がそれを受けたところが、敢て自身の尊嚴と威信に係はるでもないので、前に述べた通りに快く同行を約したのである。

船長は吾輩等の思立ちを聞いて、置去りにはしないから安心して大におやり

なさいといふ。二人は直ちに小蒸汽で上陸した。で、其足で停車場に駈け付けると、今直ぐに發車するといふ、こいつは願つたり叶つたりだといふので、急いで切符を買ひ一等室へ飛乘ると、間もなくガタン〳〵と動き出した。

何しろ餘り日數がないので遠方へ出掛ける譯には行かぬ。そこで海岸から六十哩ばかり奥へ入込んだ或淋しい停車場で下車し、其處から五六人の土人を傭ふて、山道を五里ばかり奥へ、とある森陰へ一行は御輿を据えた。

なくもがなとは思つたが月はあつた。種族猛獸毒蛇の棲む熱帶の大森林の夜は、閑こそ却々に心安きものである。宵月の光りが濃綠の樹々の繁みを射貫いて、ジメ〳〵と濕める草の上に坐を占めた一行の顏を紫紺色に見せて居る有樣は、吾ながら此世にあることゝは思はれない程物凄い。何處からとなく野猿や怪鳥の叫びが聞える。スタクトン君は其度毎にあれば何といふ猿これは何といふ鳥だと一々説明して呉れた。時々はウオーッといふ凄じい咆哮の聲が森を搖

がすことがある。

『ソラ獅子の來襲だ！』とスタクトン君は頓狂な聲をして吾輩を慄かせる。

『來ればいゝが迎も來まいテ。』と吾輩自若として居ると、慄かし甲斐がないといつて呵々大笑する。

夜が次第々々に更けて行く。猛虎一聲山月高の句を思い出さずには居られない。斯う更けては猿が怒鳴つてさへ悽慘の氣が一段と高まるものを、月を背にした巖頭に立つた虎の奴が、眼下千仞の大溪流を睨まへて一聲高く嘯くとき、如何なる神經の鈍い者と雖も、一種の戰慄を覺えずには居られない。

猛獸の來襲を防ぐための焚火の焔が、新しい枯枝を加へる夜毎にパッと強く立上つて、一しきり四邊の木立を明晰とさせる。スタクトン君は太い二連身の象打の獵銃を傍に引寄せて、過去三四年に渉る痛快なる狩獵談を又新しく語り出す。吾輩は又スタクトン君の猛獸打を借りて、イザ鎌倉といふときの用意に、

自分の側へ引寄せて熱心に耳傾けた。

斯くて其夜は一睡もせずして曉を待つた。瑯玕した危險が迫つて來ないときは、ホッと一息吐くと共に、却つて又氣抜のするものである。そこで吾輩は夜が明けると、自分で疲勞れたとも知らずにウト〳〵と睡つたものと見える、誰か自分を呼起すやうな氣持がするので、ハッと思つて眼を醒ますと、スタクトン君がニコ〳〵しながら、

『朝食だ。朝食だ。』といつて居る。

『難有う。吾輩何時の間にか寢てしまつたんだね。些とも知らなかつた。』と吾輩はまだ睡り足らぬ澁つたい眼を擦りながら身を起した。

『今土人に敵狀偵察を命じて置た。何とか報告して來るだらうと思ふ。』

『道理で三人ばかり不足してると思つた。何かね。獅子か、虎か、それとも象か。』

『イヤ今日は少し風變りな奴をお見舞申さうと思ふ。尤も近頃非常に少くなつたからね。居るか居ないか確かなことは解らん。』

『フーム何だね。犀か、水牛か。』

『何有河馬さ。』

『河馬？　そいつは面白い。成程風變りで愉快かも知れぬゾ。』

吾輩等は這麼ことを話しながら、用意のビスケットを噛つて居ると、遙か向ふから三人の土人は息せきゝつてやつて來た。

（十九）痛快極まる河馬狩

※敵なのが四頭――そいつは愉快だ――少し遠過ぎる――獅子とも牛とも付かぬ聲――大丈夫――大入道の如き頭――銃は銃打ちの大一番――見事打斃した

三人の土人は疾きにスタクトン君が、偵察に遣はした者共であつた。

『何うだい。居なかつたか。』とスタクトン君は、まだ土人が十五六間も向ふに居るのに聲を掛けた。

『居ました。※敵なのが四頭。』と土人の内の一人がいふ。

『何ッ四頭？』とスタクトン君の顏は見る〳〵内に輝いた。

『そいつは愉快だ。中村君、四疋居たさうだぜ。ウンと一つやつて呉れ玉へ。』

『宜しい。合點だ。』

一同は勇躍して起上つた。で、河馬を發見して歸つて來た三人の土人を先頭にして、彈藥其他を他の土人に背負はせ、非常な困難を犯してとある湖水の汀に出た。此湖水といふのは面積が極めて狹かつた。周圍は深い草叢で一道の水路を以て附近を流れて居る河と連絡して居た。

『オイ何處に居るんだ。』と吾輩は一人の土人の肩を叩いて問いた。

『ソラ彼處を御覽なさい。』といつて指で致へる。

成程其處を見ると變挺な形をした獣が二疋水打際へ這上つて居る。そして牛と獅子の雜種擘を出してウオー〳〵と唸つて居る。

「二頭しきや居ないぢやアないか。」と吾輩はスタクトン君を顧みた。

「殘餘の二頭は水中に潜つて居るかも知れない。今に頭か體かを浮かすに相違ない。まア待つて居玉へ。」と先生切りに狙撃の方略を考へて居るかのやうに小首を傾ける。

「此處からぢやア少し遠過ぎるかね。」と吾輩は打ちたくつて堪らぬからスタクトン君をせき立てる。

「少し遠過ぎるな。だが餘程氣を付けて接近しないと悟られるテ。困つたな。」

目測だから正確ではないが、二百米突はあつたらう。普通ならば此位の射距離で命中を覬まるやうなことはないが、相手が岩のやうな堅固な體を有つて居るのだから、近寄れるだけ寄らなければならぬが、さて音を立てずに其目的を

達する譯に行かない。で、暫くは物陰に隱れて河馬の樣子を窺つた。一疋の方は傍向いて何か食つて居る。他の一疋の方は人間の五六人位一口に飲んでしまひさうな大きな口をパクリと開けて、例の牛とも獅子とも解らない變な聲を出して居る。と思ふと今度は水面にポカリと浮いたものがある。能く見るとそれが殘餘二疋の河馬であつたので、さらでだに興奮してる胸は急に又躍り立つた。

最う何うにも辛うにも打ちたくて堪らない。

「ウム却々太い聲。」とスタクトン君は獨語する。

「皆隨分大きいね。十呎は充分あるだらう。」と吾輩がいふと、

「無論あるね。」とスタクトン君はいひながらノソリ〳〵と草叢を分けて進み出した。

スルト今迄岸に上つて居た二疋の河馬が、別段物音を聞付けた樣子もなかつたのに、ザンブとばかり水の中に躍り込み、盛に飛沫を散らしつゝ他の二疋と

共に向ふの方へ泳ぎ去つた。

『イヤ失敗つた。』 とスタクトン君は無念さうにいふ。

『大丈夫！　又屹度近寄つて來るに相違ない。』 と吾輩は口でこそさういつたが、其實一時は多少落膽せざるを得なかつた。

それでも結局以前二疋が上陸して居た地點まで進み、其處へ隱れて居て時機を待たうといふことに相談を定め、丈なす水草を掻き分け〳〵蟹て目指す處までやつて來ると、彼等が常に水面から此處へ上るのを習慣にして居ると見えて、例の無恰好な足跡が矢鱈其邊にあるかと思ふと、糞なども壘々と堆くなつて居る。

『何うだい、君、行儀の惡い奴等ぢやないか。』 と吾輩がいふと、

『左樣、呑氣なものさね。』 とスタクトン君がいふ。

其處で一時間も待つたらう。さうする內に朝日がカン〳〵と照り始めた。處

が吾輩等の陣取つた場所からは、恰度朝日が正面になつて居るので、照準には甚だ不利益である。併しそんなことをいつてる場合でないので、四頭の河馬が近寄るのを今か今かと、首を長くして待つて居た。

『取うソロ〳〵近處へやつて來さうなものだ。』 と吾輩がいふと、其途端に前方約五十呎位の處へ、揃ひも揃つて四頭其ニュッとばかりに、其大入道のやうな頭を突き出した。

ソレッ！　といふので、突嗟の間に照準を定め、吾輩は一番左側に浮いた奴を目掛けて、一發ヅドンと打放すと、見事に命中して例の氣味の惡い唸き聲を立てゝ、四疋を悶き〳〵水面下に沈んでしまつた。そこで直ぐ次の奴をと思ふと、吾輩と同じくスタクトン君が射殺けたのを除いて、殘餘二疋は吃驚して水面下に潛り込んでしまつた。

吾輩は到底他の二疋を射ることはできまいと思つた。處が案外にもそれから